
電腦うさぎとココロのありか

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳うさぎとココロのありか

【Nコード】

N3005P

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

顔はホスト並みに良いが、その純真な子供っぽさの為か、熱すぎる性格のせいか、どうも彼女の出来ない

高校教師、稲葉幸一。

学校にはナイショだが、彼は探偵事務所ラビット・ドットコムの一員でもあった。

ある日ネットで知り合った少年に相談を持ちかけられ、人の良い稲葉はそれを解決すべく奮闘する。

同じ頃、ラビット事務所所長、宇佐美諒うさみ りょうは、ある人捜しの依頼をうけていた。

また一方で、サービス業「かたづけ屋本舗」を営む男は、作業をしていた部屋で、気になる日記を発見する。

それぞれで展開されるいくつかの物語が、やがて少しずつ交差し、ある悲しい事実を浮かび上がらせてゆく。

一度幕を降ろしたラビット・ドットコム『特別版』です。

第1話 暗闇から

- - - - - プロローグ（あるチャットルームより） - - - -

ENMA：『なあ、トム。近頃ここにいる時間、減ってないか？』

トム：『そうかな。時間を確認していないから分からないけど』

ENMA：『ぜったい短くなってる。来るのだって遅いし。もう飽きたのかよ』

トム：『そんなことないよ』

ENMA：『ボクがここに来たとき誰もいないと腹が立つ。ムシヤクシヤする！』

トム：『ごめんね』

ENMA：『退屈なんだ。一日中ボクは退屈なんだ。君が居ないと気が狂いそうだ』

トム：『ごめん』

ENMA：『君は謝ってばかりだな。つまんない。もっと楽しい話しようよ』

トム：『どんなの？』

ENMA：『ワクワクする話だよ。例えばさあ、ねえトム、放火つてしたことある？』

トム：『え？』

僕は一瞬書き込みを躊躇した。

唐突に、また彼は少し雲行きの怪しい方向に話を持っていくようにしている。

今までも何度かあった。

冗談とは分かつてるが、犯罪をちらつかせる内容に話が行くと、僕は気持ちが悪んでいく。

この非公開チャットルームに入り込んだのは2カ月前。最初は何人かで話をしていたのに、ENMAは何故か僕だけに話しかけるようになった。気が付いたら彼が管理するこのチャットルームは認証制になり、僕しか入れなくなっていた。

ENMA：『あれってさ、すごく興奮するらしいな』

トム：『・・・・・・・・』

ENMA：『何か言えよ』

トム：『放火は犯罪だ』

ENMA：『だからスリルがあるんじゃない。トムはやったことある？』

トム：『あるわけないよ。ENMAは？』

ENMA：『やったことある』

トム：『ENMAはその部屋から出られないんじゃない？ 出られるようになったの？』

ENMA：『だから仲間にやらせたんだよ。ネット仲間にさ。ゲーム感覚の悪巧みにはすぐに乗ってくる最強の仲間が沢山いるんだ。』

トムも仲間だろ？』

トム：『僕は・・・』

僕はその時、即答できなかった。なんだか彼が怖くて。それを今はとても後悔している。

街の中心地から二駅ほど離れたニュータウン。小高い山を切り開い

て作られた高台にその白亜の女子校はあった。

下校時間まぎわの校舎は、クラブ活動の後片付け等で再び女生徒達の軽やかな声で賑わっていた。

「稲葉先生、あの、ちょっといいですか？」

その日のカリキュラムを終えて校門を出ようとした稲葉の元に、二人の女生徒が少し恥ずかしそうに駆け寄り、そのうちの背の高いロングヘアの女の子がそう言った。

校舎やグラウンドにはまだ他の生徒が多数いて、その目を気にするような可愛らしい仕草だ。

「え？ 何？」

重いテキストの入ったショルダーバッグを抱え直しながら、稲葉は爽やかな笑顔を作った。

稲葉幸一、28歳独身。

定時である6時までには、その女子校の2年の歴史を受け持つ、ごく普通の高校教師だ。

スツキリと鼻筋が通り、切れ長の涼しげな目、ほっそりとした顎、すらりとした体。

産休の講師に替わる臨時講師として就任した当時は、女生徒たちに「ホスト先生」と言われるほどその容姿は人気だったが、その名も次第に影をひそめた。

理由は簡単だ。

純粹さ故の子供っぽさ、イノシシもびっくりな猪突猛進型熱血漢、天然ぶり。

好感は持てるが、生徒のみならず、同僚の教師さえもそのギャップに一度は驚く。

「残念王子」という新しい影のニックネームも、その好感度ゆえの産物だ。

けれど、定時を過ぎた彼には、もう一つ別の仕事があった。

今現在はバイトにも及ばない、ただの押し掛け見習いに過ぎないのだが、

学校にはナイショで通っているもう一つの職場。

それは中心街のオフィスビルの一室にある、小さな個人経営の探偵事務所だった。

第2話 稲葉とラビット・ドットコム

探偵事務所の名は『ラビット・ドットコム』。

所長の宇佐美が、先代の卯月所長の名と、自分の宇佐美の名から、遊び心で改名した名だ。

稲葉とラビット事務所との関係が始まったのは、ほんの一年ほど前になる。

ある依頼の元に、この女子校に潜入していた探偵、宇佐美諒うさみ りょうとの出会いがきっかけだった。

宇佐美の仕事と人柄に惚れ込んだ稲葉は、押し掛けるようにしてその探偵事務所に入り込んだ。

クラスの担任も部活の顧問も免除されている稲葉は、いつも学校から直接事務所に向かうのが日常だった。

けれど今日は門の前で呼び止められ、稲葉の前で二人の可愛らしい女子生徒が頬を赤くしている。

受け持ったことのない、名前も知らない生徒達だった。

稲葉はそのシチュエーションにドキリとする。

これは、もしかや……。

しばらく忘れていた青っぱいサワサワとした気持ちの隅にポツとわき上がる。

良くも悪くも単純で純粋な青年の健全なる思考パターンだ。

稲葉の場合、あまり経験のないシチュエーションなのは間違いない。

「先生、あの……」

背の低い方のショートカットの女の子が恥ずかしそうに顔を上げると、もう一人の背の高い子は

がんばって、とばかりに一歩後ろに下がった。

“なんてかわいらしい”

まるでシナリオ通りのその動きに稲葉はドキドキする。密かに憧れていたシチュエーションだ。

だが、顔に出すわけにはいかない。ここはあくまでクールに冷静に。そう思いつつも、シヨルダーバッグを握る手が汗ばんできた。

「どうかした？」

これ以上無いほど優しい声を出してみた。

彼女いない歴12年。

真面目に生きているはずなのに何故か『うざい』とか『面倒くさい』とか言われ、友だち止まりがオチだった。

確かに趣味のゲームや、好きな映画や漫画の話をし始めたら止まらない癖はあった。けれど宇佐美などはいつも楽しそうに聞いてくれる。そんなに欠点だとは稲葉本人も思っていなかった。じっと見つめられて『顔はいいのに残念よね』と言われた時には何と返せばいいのか分からなかった。

もちろん女子生徒と・・・などと考えたことは無い。不謹慎きわまらない。

けれど、たまにはこんなボーナス、あってもいいじゃないかと思った。

黄昏時の柔らかい風が懐かしいような土の匂いを運んでくる。

その女の子は緊張した表情で稲葉をじっと見つめ、一歩近づいてきた。

近い。かなり近い。思わず一歩下がりそうになるのを踏みとどまる稲葉。

小顔で小柄でとても可愛らしい女の子だった。

なんだかとてもいけない事をしているような気分になり、稲葉の全身がじわつと汗ばむ。

女の子の唇がゆっくり開いた。

「先生。稲葉先生・・・わたし、あの、せんせいのこと・・・」

その時。

「シロちゃーん！」

女の子の語尾をかき消すほどの大きな声と、その体が稲葉に激突してきた。

一瞬未知なる肌色触手生物が襲撃してきたのかと思った。

稲葉の首にもつちりした瑞々しい白い腕が巻き付いて来たのだ。

正面にいる二人の女の子も目を見開いて固まっている。

稲葉のことを『シロちゃん』と犬のような愛称で呼ぶのはこの世でただ一人。

（因幡・いなばの白うさぎから取った名らしい）

そして、大胆なスキンシップを図ってくるのもこの人しかない。

首に巻き付かれたからなのか、甘いコロンの香りのせいなのか、一瞬クラリとしながらも気力を振り絞り、稲葉は噛みつくように大声で言った。

「李々子さん！ 何してんですか！」

振り返った先には少しも動じず、ニツコリと妖艶な笑みを浮かべている年上の女性がいた。

緩く巻いた栗色の髪。色白の瓜実顔にペルシャ猫のような大きく勝ち気な目。そして透け感漂うシフォンブラウスにショートパンツ。相変わらず露出度が高い。

彼女は卯月李々子、35歳。

色っぽさと子供っぽさを絶妙に配合したこのお色気お姉さんは、宇佐美の下で働くいわばマネージャーのような存在だ。

一目見て稲葉を気に入ってくれたらしく、以来変わらず濃いスキンシップで稲葉をかわいがってくれている。新人社員としてというより、ペットとして、と言った方が近いような気が稲葉にはしていた

が。

「近くまで来たんでシロちゃんの学校覗いてみたくなったのよ。それにしても、すごくきれいな校舎なのねえ。びつくりしちゃったー」
「びつくりはこつちですよ！　って、手を放してください。ここは学校なんですから！」

真つ赤になつて稲葉が叫ぶと李々子はスルリと手を引つ込め、今度は目を丸くして立っている二人の女生徒を見つめ、ニコリとした。

「あらー、かわいい生徒さん。こんにちはー。稲葉がいつもお世話になってますー」

「いや、李々子さん、その挨拶ちよつと間違つてますから」

女の子たちに近づく李々子を引き寄せながら稲葉は慌てて二人に取り繕った。

「ごめんね、なにか話があつたみたいなのに。あの・・・この人酔っぱらつてるみたいだから連れて帰るよ。近所の人なんだ。また今度話を聞くから」

困惑顔の女生徒二人を残し、稲葉はそのまま李々子をひっぱりながら門を飛び出した。バツが悪くて振り返ることができない。部活の生徒の視線もいくつか感じた。妙なうわさが立たなきやいいんだが、いろんな事を考えながら稲葉は、門が見えなくなるまで李々子をひっぱって歩いた。

「あれえ？　怒ってる？　シロちゃん」

覗き込むように見つめてくる李々子をチラリと見て、稲葉はようやく手を放した。

「怒ってますよ。学校で抱きつくのはやめてください。僕、一応教師なんですから」

「だってー」

李々子は少し拗ねるように唇を尖らせた。

「かわいいシロちゃんをあんな若い子に取られちゃうなんて悔しいじゃない」

「取られるとか、無いですから！ 僕は教師ですよ。生徒となんて何も起きません！ それに、李々子さんには宇佐美さんが・・・」

言いかけてハツとした。

まだこの話題を振るのは微妙な時期だ。

李々子は先月、ある事情で探偵社をたたもつとした宇佐美に、ずっと一緒に居たいのだと自分の想いをぶつけた。

けれど宇佐美は、事務所を存続させることでその想いに答えた。・・・と、本人思っている。

あれはきつと告白だとは思っていなかったのだと稲葉は確信していた。

そして李々子もそこで何かが吹っ切れたように、何事もなかったかの如く、今までの関係にもどった。

呆気ないほどに。

いったいどこで李々子が吹っ切れたのか稲葉にはわからなかったが、説明されたところで理解はできないのだろう。実に不思議な関係の二人だが、稲葉には何となく、それはそれで良いんじゃないかと思えた。

そして二人は今のままでいて欲しいような、そんな想いもあった。

「諒が待ってるわよ。今日は寄り道無しで行きましょうね」

いつも自分が寄り道を誘うことを棚に上げ、李々子はそう言ってニコリと笑うと駅の改札を抜けていった。

稲葉も定期を取り出す。

それはマンションと学校を往復するだけだった昨年までは必要なかった物。

宇佐美、李々子、稲葉、3人で構成されるラビット・ドットコムへ
行くための、特別な定期だった。

第3話 居場所

ラビット事務所は稲葉の学校の最寄り駅から二駅目の、桜木駅から徒歩5分のオフィスビルの13階にあった。

「わかりました。では一度こちらへお越しただいて、お話を伺うと言つことによろしいですね。はい。ではその時間にお待ちします」

稲葉与李々子がドアを開けると、ちょうど宇佐美が電話を切る所だった。

宇佐美諒、34歳。高身長で引き締まった体。どことなく愛嬌のある目に、緩くウエーブした癖毛。

稲葉のような典型的二枚目タイプではないが、初対面の人間に親しみを感じさせる独特の柔らかい雰囲気を持っている。

准教授の椅子も狙えるほどの優秀な医大院生であったが、訳あって中退した経緯を持つインテリ人間だ。

稲葉が一目置く部分でもある。けれど、その飄々とした人間性と大らかに、稲葉はそんな諸々を忘れてしまう。

「あれ？今日は早かったな、稲葉」

電話を切った宇佐美が話しかけてきた。

「李々子さんに学校の門の前で抱きつかれて、慌てて出てきましたから」

「女子校の門の前で抱きついたのか、李々子は」

宇佐美は少し大げさに驚いて李々子を見たが、目が笑っている。

今更李々子がどんな奇行に走っても、この、すべての物事に冷静沈着に向き合う男には楽しい余興でしかない。

「あら、キスしなかっただけマシでしょ。自粛してるのよ、これでも」

「基準がおかしいですよ、李々子さんの自粛は！　なんでキスするんですか！」

悪びれない李々子に稲葉が不服そうに反撃する。

稲葉のピュアな反応に宇佐美がまた楽しそうに笑う。

変わらない、いつものラビット事務所の風景だ。

教師としての仕事や対人関係でどんなに落ち込んでも疲れても、ここへ来るとなぜか安心感に包まれ、

次への活力が湧いてくる。

稲葉は、ここが自分の「居場所」だと強く感じていた。

「依頼の電話だったんですか？」

そう言いながら稲葉は自分のデスクに座り、小型のノートパソコンを開いた。

正社員ではないにもかかわらず、少し前に自分専用のPCを買って貰って稲葉はご機嫌だった。

「うん。人捜しだよ。明日ここで詳しい話を聞いて見積もりを出す」

「へえ、人捜しか。ややこしくなければいいですね」

「そうだな。情報が少ないと時間と経費ばかりがかかってしまうから。まあ、各方面にいろんな人脈が作ってあるから意外と早いケースもあるけどね」

「へー、そうなんですネ」

稲葉は相づちを打ちながらもPC画面に気持ちが奪われ気味だった。

背後からそつと画面を覗き込む李々子。

「シロちゃん、ゲームしてんの？」

李々子の声に稲葉はハッとして振り向いた。

「あ、ごめんなさい。5分だけチェックさせてください。部活の顧問を免れる替わりに教頭から頼まれた仕事なんです」

「なあに？」

李々子が興味深そうに画面に近づく。

「掲示板です。2ちゃんねるって聞いたことあるでしょ？ あんな感じのかなり大きなサイトなんですが、ここで以前うちの生徒の実名と写真公開の嫌がらせがあったんです。その問題は終息したんですが、また何かあったら大変でしょ？ 定期的に怪しい書き込みがないかチェックしてるんです」

「へえー、なんか怖いわね。なんでそんな不健全な場所に行くんだろうね、若い子って」

「そうですね、ミクシーみたいなソーシャル・ネットワークキングダムなら、妙な書き込みもできなくて安全なのに。依然としてそういう怪しげなサイトは無くならないですね」

「ねえ、シロちゃんはどんなことするの？」

「いえ、僕はただ書き込みを読んで、たまに悩んでる子を励ますコメントを入れたり、軽犯罪を仄めかす書き込みに注意するくらいで、たいしたことはしてないんですが」

「でも、今の子って、注意とかしたら怖いんじゃないの？」

「そりゃあ上から目線で言うとは反感買います。まずは共感して親しくなって、それからです。結構みんな素直なんですよ。そんなに根っからの悪い子っていませんよ、きつと」

稲葉が少し嬉しそうに言った。李々子もその表情を楽しそうに見つめる。

「ねえ、シロちゃんのハンドルネームって何なの？」

「覗きに来るつもりでしょう、李々子さん。イヤです。ぜったい教えません！」

「行かないわよー。そんなに暇じゃないもん。ああいうサイト嫌いだし。読んでたって面白くないし」

「ほんとう？」

「うん」

ニコリと微笑む李々子。稲葉はこの艶やかな笑顔に弱い。

「電腦うさぎ」

「え？」

「だから電腦うさぎ」

李々子はスツと画面から離れ、体を起こすと肩をすくめた。

「ネーミングセンス無いわねえ、シロちゃん」

李々子のつぶやきに、後ろで作業していた宇佐美がプツと笑う。

「ほっといてくださいよ！」

やっぱり言うんじゃないかった。稲葉は口を尖らせて、ノートPCをパタリと閉じた。

ENMA：「ねえトム。大和市の廃屋でボヤ騒ぎあったの、知ってる？ 君の住んでる近くじゃない？」

トム：「近くじゃないけど知ってるよ。2日連続しておきてるよね」

ENMA：「あれさ、ボクの友だちだと思うよ。冗談で誘ったことがあるんだけどさ、まさか本当にするとは思わなかった」

トム：「本当なの？」

ENMA：「もっと派手にやるつもりだったって言ってる」

トム：「どうしてそんなことを」

ENMA：「ボクがやった訳じゃないよ。こっから出られないんだし。たださ、あそこは無くなってもいい廃屋だよな、燃えそうな廃材もいっぱいだしって言ったら面白がっちゃって。数人でつるんでやったんじゃない？ お互い顔も名前も知らない奴らがつるんで、スリルを共有するんだ」

トム：「どうして……。とても怖いことだよ。やめようよ」

ENMA：「だれも怪我人なんて出てないよ」

トム：「でも、やっぱりそんなことダメだよ」

ENMA：「トムは優等生だな。生まれてから悪い事なんて一度も

したことはないんだろ』

トム：『そんなこと・・・』

ENMA：『きっと君は自分の存在を疑問に感じて苦しんだり鬱屈したりしたことは一度もないんだろ？ 幸せな人間なんだ。結局僕は住む世界が違う。分かり合えない。友だちでも何でもない』

トム：『そんなことはないよ』

ENMA：『じゃあ、トムは、ここから出ることさえできないボクに、何をしてくれる？ 何もしてくれないだろ？』

トム：『こつやつて話をしてる』

ENMA：『足りない！ タリナイ！ タリナイ！ タリナイ！ タリナイ！ タリナイ！！！！！！』

トム：『- - - - -』

ENMA：『黙るな！ 君が黙ると寂しい。怖い。・・・君がここに居てくれないと気が変になりそうなんだ。トム。毎日ここに来い。いつもボクと話をしろ。もっとボクとの時間を増やせ。そうでないとボクはまた何かヤル。君のせいで、なにか大きな犯罪を犯す』

トム：『そんな・・・やめて。僕、また来るから。絶対に来るから。ね、ENMA、約束する。・・・おやすみ』

僕は逃げるようにチャットルームを出た。

どうすればいいんだろ。僕はどうすれば・・・。

第4話 片づけ屋、片瀬

「本当にこの部屋ですか？ 大家さん」

片瀬は、築29年になるその古いアパートの一室を見渡した。

『片づけ屋本舗』経営者、片瀬直哉38歳。

日焼けした顔、広い肩幅、厚い胸板。いかにも力仕事のできそうな印象の持ち主だ。

アパートの2階にあるその部屋はベランダもなく、唯一の窓も隣のビルの壁に遮られ、昼間だというのに薄暗かった。

貧しさと寂しさを感じさせる空間だが、片づけ屋を商売にしている片瀬には別段珍しい部屋ではない。

ただ、すっきり片づいていることに違和感を覚えた。

「わりと綺麗に片づいてるでしょ？ きちんとした方でしたからねえ、亡くなった沢村さん。遺族は部屋の物は全部捨てちゃってくださいって言っていましたよ。なんでも沢村さんとは、ほとんど付き合いの無かった遠い親戚らしいですからね。遺族って言われるのも迷惑なんですよ。」

葬式を誰が出すのかで揉めてるんで、この部屋のことまで手が回らないらしいですよ。きつとあれですよ。葬式もやらないと思いますよ。家族葬って建前にしてね。まったくね。亡くなった沢村さんも気の毒ですよ。身寄りがないってのは、結局こういう事になるんですね」

50歳前後のでっぷりと太ったこのアパートの大家の女は、顎に手をやりながら、とにかく早口でそう言った。

お喋りな性格は、その話っぷりからも伺える。

このぶんでは側に居られるとずっと喋り続けられると思った片瀬は、

礼を言っと、

「では、終わったら声をかけますので」、と自室に引き取って貰った。

階段を降りながらも大家の女は「本当になんもかんも捨てちゃってくださいよ」と付け加えた。

苦笑する片瀬。

趣味の登山の金を稼ぐために『片づけ屋本舗』を創業して8年。

片瀬直哉は、仕事上あらゆる部屋を見てきた。

主な業務内容はアパート、マンション、持ち家、事務所等の部屋の掃除だった。

人間の中にはどうもゴミを片づけられない人種が存在する。それは単にだらしないだけのレベルのモノから、病的なものまで様々だ。

天井までゴミが蓄積し、部屋が3年間も機能していなかったマンションや、腰まであったゴミを撤去してみると、行方不明だったハムスターの死骸が何匹も出てきた家もあった。

2トントラック何台分ものゴミを送り出しガランとした部屋を見ると、仕事を終えた爽快感よりも人間の存在の愚かさを感じ、重い気分になってしまう事の方が多かった。

そして『片づけ屋本舗』のもう一つの業務として、今日のような片付け作業も請け負っていた。

身よりのない住人の孤独死の後片づけだ。

遺体の運び出されたあとの家財道具一式の撤去作業。

依頼人はマンションの大家や管理人のことが多かったが、今回は親族に連絡が付いたらしく、遺族からの依頼だった。

自腹を切らなくて良かったと、大家の女が嬉しそうに言っていた。

好き嫌いはい言っていられないが、タフな片瀬にしても、こっちの作業はかなりキツイ。

今回亡くなったのは沢村久49歳。

6年前からこのアパートでひっそり暮らしていたらしいが、10日ほど前、部屋の前で倒れていたのを他の部屋の住人に発見された。若いのに脳溢血だったらしい。

仕事以外の時間はとにかく部屋に閉じこもって過ごす、無口で穏やかな男だったと大家の女は言った。

「片瀬さん、じゃあ始めますね」

一緒に連れてきた二人の若い従業員、木ノ下と吉川が確認を取る。二人とも大学を出たばかりの新人だが、とても気のいい頑張り屋の青年達だ。

「ああ、そうだな」

片瀬はそう合図を出したあと、もう一度部屋を見渡した。

小さな筆筒、座卓、ビニールの衣装ケース、錆びた中古と思われる冷蔵庫、食器棚。

そしてほんの少しの生活用品と雑貨。

まだ若い49歳の男は、この小さな寂しげな部屋で何を生き甲斐に暮らしていたのだろう。

片瀬は今回も思った。

心も体も失い、唯一残った生活用品も、今、見ず知らずの者たちによつて捨て去られようとしている。

誰にも惜しまれず、誰にも泣いてもらえず。

彼の人生とは、いったい何だったのだろう。

考えても仕方がないことについて思いを巡らせてしまうのは、片瀬の悪い癖だった。

この業務をこなす上で、一番切り捨てなければならぬ感情だということとは分かっていたが、

必ずこの罪悪感にも似た想いに捕らわれてしまう。

二人の従業員がテキパキと荷物を運び出していくのを見ながら、今日はさほど時間はかからないなと片瀬は思った。

3人も必要なかったことをほんの少し後悔しながら、部屋をもう一度確認した。

部屋の隅の座卓の上に、まだ新しい小さなノートパソコンがあるのに目が行った。

きつちりとモデムや外付けハードが繋がれている。

そしてその横に、添えるように重ねられた4冊の大学ノート。

仕事のために、パソコンの勉強でもしていたのだろうか。

片瀬は何気なくそのノートの一冊を手にとってみた。右上に「1」と小さく番号が振ってある。

ページを開いてみるとそこには、シャープペンで書かれたきつちりとした文字が並んでいた。

『――3月27日――』

今日はとても寒い。

美佐子、君が生きていた頃は仕事から帰っても、家のドアを開けるとすぐに疲れが飛んでいったのを思い出す。

部屋は明るく、温かく、優しさに満ちていた。

今はね、帰ってきて電気をつけ、部屋が暖まるまでの数十分が一番辛いよ。

今日は泣きことを言ってみた。・・・すまない。』

「日記か」

片瀬は独り言をつぶやいた。

年号が書いてないので、何年前の物なのか分からない。

ノートの番号から、これが1冊目であること、そして亡くした奥さ

んに宛てた日記なのだと言うことは推測できた。
片瀬はナンバー「3」を手に取り、再びパラパラとノートをめくったが、ふと違和感を感じるページで手を止めた。

『――11月15日――』

遠馬は本当に素直でいい子に育っているよ。

私が帰るのをずっと首を長くしてまつてるんだ。寂しがり屋なんだね。

時々、どこで覚えて来たのか酷く乱暴な言葉を使う事があるんだが、根気よくそれは悪い言葉だと教えてあげている。そうすると二度とその言葉は使わない。本当に賢くていい子だよ』

子供がいたのだろうか。だが、確か一人暮らしだったはずだ。

片瀬は不思議に思い、パラパラとページを戻した。

けれど子供の話は、仕事の愚痴や日常の何でもない話の隙間にポツポツと書かれているだけで、詳しいことは分からなかった。

たぶん、ここに移り住む前に育てていた子供であり、何らかの事情で引き離されてしまったのだろうか。と片瀬は思った。したがってこれは随分昔の日記なのだろう、と。

「片瀬さん、これ、片方持ってもらえますか？ 吉川、今トラック移動させてるんで・・・」

ひよろりと背の高い木ノ下が、小型冷蔵庫の横に立って申し訳なさそうに言った。

「ああ、すまん。今行くよ」

側にあつた小さめの紙袋にそのノート4冊をガサツと放り込むと、片瀬は急いで作業に戻った。

第5話 SOS

「野崎さんですね？」

宇佐美は事務所に招き入れたその背の低い男にニコリとし、応接セツトのソファに座らせた。

昨日の電話で、行方調査の依頼をしてきたのがこの野崎だった。

歳は50歳前後、と言ったところだろうか。

小柄ながらも濃紺のスーツをきっちり着こなし、いかにも名刺に書かれている肩書きが似合いそうな男だった。

「情報通信技術開発の会社をされているんですね」

男から受け取った名刺を見ながら宇佐美がそう言っていると、野崎は人の良さそうな笑顔を見せた。

「はい、去年設立したんですが、小さな会社です。まあ、通信機器のシステムサポートやメンテナンスが主な業務内容なんですが、新たに技術開発にも力を入れようとしているところなんです」

「そうなんですか」

宇佐美は気さくに話す野崎に好感をもった。

ここに依頼に来る人間は名刺をくれるところか、あまり自分の素性を明かさない。

大っぴらにしたいくない事情もあるから、こちらから訊くこともなかった。

「と、言うことは、そのお仕事と今回の依頼と何か関係があるので
すか？」

宇佐美がそう言うと野崎はゆっくり頷いた。

そしてセカンドバッグから一枚の茶封筒を取りだし、そのままテーブルの上にそっと置いた。

大きさから言って、探して欲しい人物の写真なのだろう。写真は取り出さないまま、野崎は話を切りだした。

「実はもう6年近く音信不通になっている古くからの友人がいます。その人を捜して欲しいんです。

彼は高校、大学と、青春時代と一緒に過ごしてきた学友なんです。とても才能のあるプログラマーでした。

彼は大手通信機器メーカーに就職し、系列会社で働いていた私の耳にも入るほどの技術者でした。

私たちは事あるごとに一緒に酒を飲み、仕事の愚痴を言い合いました。

もつぱら、愚痴を言うのは私でね。彼はいつも聞き役に回ってくれていました。けれど、・・・6年前その企業が倒産。私の会社もありを受けて大幅なリストラが行われました。

彼も私も職を失い、住居を追われ、お互い連絡も取れなくなっていました。2年くらい前に彼をこの街で見かけたと知人に聞いたのが最後です。虫のいい話ですが、この事業を立ち上げる上で、もし彼に協力してもらえらばと思い立ち、実家を訪ねたんです。けれど実家はすでに無くなり、誰に聞いても行方がわかりません。事実が分かりませんが、厄介な病気で入退院を繰り返しているという噂だけが入ってきました」

最後の方になると、元気の良かった野崎の声もだんだん小さくなり、視線も自分の組んだ手の辺りを彷徨っていた。

「それはご心配ですね」

宇佐美が優しく声をかけた。

「虫が良すぎますよね。いままで音信不通だったくせに、自分の起業のために捜し始めるだなんて」

「いえ、そんな風には思いませんよ」

宇佐美がそういうと、野崎は力なく笑った。

「・・・ありがとう。でもね、言い訳がましいですが本当に心配なんですよ。自分の仕事とは関係なく。きつとどこかで自分の技術を生かして元氣にくらしてくれている。それが確認できれば、自分も安心できる。・・・矛盾してますよね。協力して貰うために捜しているのに。でも実際そうなんです」

「ええ、分かりますよ。どちらにしてもその方が見つければ野崎さんは安心できますね。きつとその方も野崎さんのお気持ちを喜ばれると思います。お力になれるよう、最善をつくします」

宇佐美は優しく微笑むと、情報を書き込むためのノートパッドとペンを手に取った。

そして、給湯スペースでカチャカチャと音を立てている李々子の方にチラリと視線を送った。

ああ、また急須が見つからないんだ。今日もお茶は間に合わないな。そう思いながら。

午後6時。

職員室のデスクで、自分のパスワードを入れて開いたPCの画面を見ながら、稲葉はしばし固まった。

いつも覗いている掲示板の書き込みの中に自分に宛てたメッセージがあったのだ。

流れとは何の関係も無いところで約1時間おきに書き込まれたメッセージ。

『電腦うさぎさん、どうか僕の部屋へ来て下さい。相談があります』
名前は「T」とだけ書かれ、そのメッセージの後ろには別のサイト

へ誘うURLリンクが貼ってある。

明らかにそれは異質で、流れを遮断していた。

当然のように他の「通りすがり」から『うぜー』『消える』等の攻撃を受けながらも、そのメッセージは屈することなく1時間おきに書き込まれていた。

「なんだ？　なんで？」

稲葉はPCに向かって思わず問いかけた。

こんなことは初めてだ。

この、相手の顔も見えない無法地帯の掲示板の中で、たった一人に向けてSOSを発進してくるというのが普通あるだろうか。

稲葉は少し警戒心を抱きつつも、じっとその短いメッセージを見つめた。

相談があります・・・助けて下さい。そう言っている。

稲葉はポンと弾けたようにそのリンクをクリックした。

何を迷うことがあるだろう。躊躇などありえない。

自分を頼ってきているのだ。今こそ力にならなくてどうする！　と。

稲葉の“入りやすい”スイッチが力チリと入った。

そこは何の変哲もない、シンプルなチャットルームへの入り口だった。

一対一で話すなら、掲示板よりもチャットのほうが適当だったのだろう。

トップには『ようこそ』。そしてそのあとに『あなたが電腦うさぎさんなら、お入りください』の文字。

明らかに管理人が電腦うさぎのためだけに設置した部屋だ。パスワードはない。

稲葉以外が入って、成りすましたらどうするつもりなのか。

そんな事を思いながら、稲葉は「入室者一人」が待つ、その部屋に入った。

第6話 相談

稲葉は、真つさらな、白地のシンプルなスペースに恐る恐る書き込んでみた。

うさぎ：『こんにちは。君が僕を呼んだんだね？』

トム：『本当に来て下さったんですね、電腦うさぎさん。すごくうれしいです。あんな形でいきなり呼び出したりして失礼しました』

待ちわびていたのだろう、すぐに返事が返って来た。

うさぎ：『いや、気にしないで。あ、あのさ、僕の名前ここでは「うさぎ」でいいよ。ネーミングセンスが無いって知人に笑われたし』
トム：『そうなんですか？ そんなことないのに。でも、了解しました』

うさぎ：『ところで、トムは僕を招待してくれたんだよね、ここに何か相談があるとかで。なんだろう。いや、そもそも何で僕を？ 掲示板でやり取りしたことあったっけ』

稲葉は常識のある相手にホツとしたこともあり、早々に本題に入った。

顔も性格も年齢も分からない相手とコミュニケーションするのは随分と慣れてはいたが、やはり自分を招待した相手となると不安もあり、早く探りを入れてみたくなる。

トム：『すみません。気持ち悪かったですよね、いきなり。僕はいつもうさぎさんの書き込みを見てて知ってたんですが。他に

うさぎさんと二人で話す方法を思いつかなくて」

うさぎ：「いやいや、それは全然かまわないよ。むしろ嬉しいよ。僕なんか呼んでくれるってのは」

トム：「それを聞いて安心しました。僕が良く行く掲示板でうさぎさんの書き込みを何度か見ました。他の人の乱暴な言動を優しく諷めたり、やんわり仲裁したり。僕、うさぎさんのコメントが大好きなんです。優しい大人の人大なうって思つて見てたんです」

うさぎ：「うれしいな。そんな風に思つてくれる人がいたなんて。」

100%ウザがられるか、スルーされるかだと思つてただけ」

トム：「みんな思つてますよ。うさぎさん、いい人だつて」

稲葉はこのログをすぐさま李々子に見せたい気分だった。

うさぎ：「でもさ、僕に成りすました人が冷やかしに来たらどうするつもりだった？ まあ、この僕が僕だつて証拠もないんだけど」

トム：「本人かそうでないかは分かります。言葉の使い方、何となくそういうの分かりませんか？ ちょっとした文章にも性格が出るんです」

うさぎ：「そう？ そうなのかな。・・・で、こんだけ褒められたあとに聞き難いんだけど、その相談つて？」

トム：「あ、そうでしたね」

うさぎ：「実生活であまり相談に乗ったり頼られたりすることはないから、力になれるか自身はないんだけど。でも話を聞くよ。話すだけで楽になるって事だつてあるからね。友だちの事とか？ それともネット上のトラブルとか？」

トム：「うさぎさん、凄い！ どうして分かつちゃうんですか？」

うさぎ：「あ、そうなの？」

トム：「実は僕のネット友だちの事なんです。僕は彼にどう接して行けばいいのか分からなくて。訊いてもはぐらかされるんで

すが、たぶん僕と同じくらいの年のはずです。名前はENMAって
言って・・・』

すっかりアパートの私物が運び出され、若い従業員二人はサービス
の一環としての部屋の掃除に取りかかったところだ。

テキパキと働く二人に隠れて片瀬は、ほんの一瞬、先程の日記を開
いた。

年号は分からないが順番からして、さっき読んだ部分の少し前のは
ずだ。

故人の日記を読むのは悪趣味だと、そのノートを捨ててしまうのは
簡単だった。

けれど、それでこの沢村という男の全てが消えてしまうような妙な
罪悪感が湧き、

弔いの儀式のように片瀬は文字を辿った。

『・・・9月25日・・・』

遠馬は時々、かわいい嘘をついて私をからかうときがあるよ。昨日
は頭が痛いんだと言ってきた。

すごいと思わないか？美佐子。他の子がするように、そんな嘘をつ
くんだ。

私がそのあと戸惑う様子を観察するんだよ。これも重要な成長の一
過程だよ。

嘘を付くことはいけないと教える一方で、こんな可愛い嘘には騙さ
れた振りをしてあげるんだ。

とても心配した振りをしてあげるとね、申し訳なさそうに、もう治
ったって言うんだよ。そうやることで「頭痛の痛み」というものを

想像するのかもしれない。

こんなやり取りがとても楽しくて愛おしい。遠馬が成長していくのを感じるのがなによりの幸せだ』

微笑ましいな、と片瀬は思った。

無き妻に語るように書かれた、日常を綴る日記。

週に一度くらいの割合で一人で育てていたらしい子供の様子が書かれているのが何とも微笑ましく、そして悲しい。

当然ながらこの子の母親も、この日記を書いている父も、もうこの世に存在しない。

この子供が今どこで生活しているのかは分からないが、きっとこの日記の存在も知らないだろう。

全てを捨ててくれと頼まれたが、自分が捨ててしまっていていい物なのだろうか。

片瀬には、その日記に沢村という人間の生きた証が詰まっているような気がしてならなかった。

パラパラとページをめくる。

ハタとその手が止まった。

ノートに目を近づけて、食い入るように読んだ。

首を捻り、少しページを戻し、やはり解せぬようにその部分を見つめる片瀬。

「どういうことだ？」

片瀬はノートを広げたまま思わずつぶやいた。

そのつぶやきに気付き、木ノ下と吉川が片瀬の方をみて苦笑する。

作業をサボって何かを読みふけている社長なんてどうかとは思いますが、片瀬はノートから目が離せなかった。

そこに書いてある意味が、理解できない。

本当に遠馬のお陰で私は心穏やかでいられる。

6年前のあの日、美佐子と遠馬が事故で死んでしまった時は本当に自分も死んでしまったような絶望的な喪失感だった。

すぐに自分も君たちを追って逝きたかった。

でも思いとどまって良かった。

再びこうやってあの子を育てることができるんだから。神に感謝している。』

第7話 人工無能

「稲葉先生。今帰りなんですか？」

校門を出る手前で呼び止められて、考え事をしていた稲葉はボーッとした表情のまま振り返った。

見ると、昨日稲葉を恥ずかしそうに呼び止めた女子生徒二人だ。そして、思い切り李々子に抱きつかれたところを見ていた二人だ。稲葉はその状況を思い出し、改めて恥ずかしさが込み上げてきた。

「ああ……昨日の。あの、昨日はごめんね。話も聞かずに慌てて帰っちゃって。えーと、君たち、何年生だっけ」

「1年です。桃井と谷口です」

桃井と名乗った背の高い方が言った。

小柄でショートカットの谷口も、今日は物怖じせずになつすぐ稲葉を見て微笑んでいる。

「あの、ごめんね昨日は。びつくりしたろ？」

無かったことにしたいとも思ったが、稲葉は小声で謝ってみた。誤解があるならば、ここで解いておきたいという願望もあった。

「え？ なんのことですか？」

桃井と谷口はそれぞれにそう言うのとニコリと笑ったが、どういう笑みなのか稲葉にはよく分からない。

水に流してくれるという合図なのか、それとも彼女たちにとっては、何でもないことなのか。

稲葉にとって女の子はいつまでたっても難解だ。

「実はね、先生にちょっと聞いて貰いたい話があったんです」
桃井が切り出した。

「聞いて貰いたいこと？」

ついさつきもチャットで相談を受けたばかりだった稲葉は、少しばかりデジャブを感じた。

何より、頼られる立場という責任の重さが、嬉しさをちよつとばかり上回った。

「そうなんです。稲葉先生、よくいろんな掲示板に行ったりしてるって聞いたことあったから」

「ああ、まあ、たまにね」

「私たち結構同じ掲示板に行って遊んだりしてるんですけどね、最近嫌な書き込みがやたらと多くて。」

別の学校の子だけど、名指しで攻撃したり。犯罪を仄めかしたり。少し前の書き込みには放火予告があつて、そこに友だちの学校の名前も入つてたり。なんだか怖くて」

「放火？ そうなの？ それどこ？ どのサイト？」

「あ、それは教えられませんよ。なんか告げ口したみたいで嫌だし。ただ書いてるだけで本当にやるとは思えないし」

今度は谷口が頬を赤らめながら言った。頬を赤らめるのはこの子の癖らしい。

そしてどうやらこの子達は昨日、このことを相談に来てたのだ。

稲葉は昨日の勘違いを猛烈に恥ずかしく思った。

もちろん顔には出さなかったが。

そんな稲葉の心の中は知るよしもなく、桃井が再び真剣な表情で続けた。

「無視しておけばいいんだけど、何か気味悪くて。その書き込みの人、『自分は人工無能だ、自分の言語が悪意に満ちてるのは、おまえ達の心が悪意に満ちてるからだ。おまえ達の罪だ。』って言うんです。」

ねえ、先生、どう思います？ 放火を誘ったり、危険な書き込みを

するのも全部その人なんです」

桃井は少し首を傾けて聞いてくる。

谷口も真剣に稲葉の言葉を待っているように見つめてくる。

「じ…人工むのう？」

稲葉は固まった。

「はい、本当にそうなのか、嘘なのか分かりませんが。あんなに口の悪い人工無能っているんでしょうか」

と、今度は谷口。

「そう…だよな。わからないよね」

“わからない。人工ムノウって、なんだ？”

稲葉は頭を巡らせたが、人工知能というワードしか浮かんでこない。

「管理人に報告しようとも思ったんですが、それもなんだか卑怯な気がして」

「うーん。難しいところだね。とにかくあまり酷かったら管理人に報告して、そして君たちはそんなところに行かない方がいいよ。健全な会話を楽しめるスペースはいくらでもあるし」

「でも、本当にそれでいいんでしょうか。何か起こったりしませんよね」

「何か？」

「だから、放火事件とか」

「…放火事件」

稲葉は再びドキリとする。そのワードは今、稲葉を悩ませているものの一つなのだ。

「本当に人工無能なら、問題ないんだけど」

谷口がぽつりと言った。再び出てきたその言葉に稲葉はたじろぐ。

「人工無能ならね」

桃井もうなづきながらそう言った。

「…人工むのうだしね」

稲葉も言ってみた。

「そうですね。きっと人工無能です。最近はそんなタイプが多いから。それならきつと管理人がどうかしてくれますよね。恨みを買うこともないし」

いきなり吹っ切れたように桃井が軽やかな声を出して微笑んだ。

谷口も、つられたように笑顔になった。稲葉も慌てて笑ってみる。

「分かりました、稲葉先生。気にせずに無視することにします。ありがとうございました。また相談に乗ってくださいね」

ハキハキと桃井が答える。

「あ、うん。先生でよければ、いつでも」

少し戸惑いがちにそう言っていると、二人は軽く顔を見合わせたあと、小さく頭を下げた。

やはり谷口の頬はずっとほんわり赤い。

二人が校舎の方へ小走りに走っていくのを見つめながら、稲葉はなんとも情けない思いでいっぱいだった。

…だめだ。こんなの相談の回答でも何でもない。

何でよく分からないのに見栄張って適当に答えてしまったんだ。失格だ。教師以前に大人失格だ…

稲葉はそう思いながらがつくり肩を落とした。

ただ、あの谷口という女の子が自分に好意を持てなかったのが救いだった。

こんな情けない何の役にも立たない自分を一瞬でも好きになったとしたら、本当に申し訳ない事だから。

李々子の昨日の心配も、全くの取り越し苦労だった。李々子にも申し訳ない。

まるで消え入りそうに自信喪失した稲葉は、小さくため息をつき、門を後にした。

「あーあ。なんか、寂しそうに帰って行っちゃったね。稲葉先生」
桃井が谷口に言った。

「やっぱりよく分かってなかったのね。しどろもどろだったし」

校舎の影からそつと稲葉の様子を伺っていた二人。

「やっぱり何か頼りないのよね、あのセンス。ねえ、本気で昨日告白しようとしたの？」

桃井が小柄な谷口を少し見下ろすように訊くと、谷口はやはり頬を少し赤らめて笑った。

「すぐく自分の気持ちを伝えたくなったの、昨日は。でも、しなくて良かった。稲葉先生、綺麗な彼女いるみたいだから。・・・ごめんね、モモ。付き合ってもらって。さっきも話題探して話しかけてもらえて、嬉しかった。一度ちゃんと話をしてみたかったんだ」

「いいって。でも、話題がまずかったかな。当たり障りのない話題にしようと思ったんだけど。なんだか稲葉先生、落ち込ませたような気がするんだけど」

桃井が申し訳なさそうに言う。

「うん。いつも一生懸命だからね、稲葉先生。きつと答えに満足いってないんじゃないかな。でも私ね、そんな所も大好きなの。ほら、普通教師って上から物を言うでしょ。でも稲葉先生はそうじゃない気がする。同じ目線で、一緒に悩んでくれそうな気がする」

「そうかあ。うん。分かる気がする。あんな先生、いてもいいよね。私も好きよ」

「でも・・・、今日は落ち込むんだろうね」

谷口が心配そうにつぶやいた。

「うん。そうだね。ちよつと悪いことしちゃったかな」

二人は顔を見合わせて軽やかに笑った。

第8話 イライザ

「人工無能？ あれだけネットやっててシロちゃん、知らないの？」
李々子はそう言いながら、やっと探し出した急須を今度はどこへ仕舞おうかと、物が溢れた狭い給湯スペースでゴソゴソしていた。

「知らないから聞いてるんですよ。人工知能なら聞いたことありますけど。何ですかその胡散臭そうなネーミングは」

稲葉は少しむくれるように李々子に言った。

やはりここで聞くよりも、PCで調べるべきだったと少し後悔しながら。

稲葉の気持ちを察してか、宇佐美がやんわりと救いの手をのばしてくれた。

「今でこそ普通にいろんなサイトに姿を現してるけど、そのネーミングは正式名称じゃないし、知らなくて当然だよ。人工無能は会話プログラムのことだ」

「プログラムなんですか？」

「そう。人工知能ほどの高いスペックを持っている訳じゃないから、“能なし”という意味で人工無能と呼ばれてるらしい。相手が打ち込んだ言葉の組み合わせと、自分の中のデータベースとのマッチングによって、最も適当だと思われる言葉に変換して応答をするんだ。混同されやすいけど、人工知能とは目的も仕様も、根本的に違うものだよ」

「なんだ。単純なプログラムなんですね。じゃあ、危険も無いはずだ」

稲葉はホッとしたように自分の椅子に腰掛けた。

けれど宇佐美は自分の作業を続けながら、稲葉に返した。

「でも、その学習能力はバカにしたもんじゃないよ。手軽なプログラムなだけに彼らはいろんな場所に出現できる。もちろんどこに所在を置くかはプログラマーの意思なんだけどね。ひとつたび解放された彼らはいろんな言葉を学習していく。スラングだったり流行のネタだったり。人間がどんな言葉が好きで、どんな返事をすれば笑ってくれるか、逆に怖がるかなんてことも身に付けていくんだ。心があるわけではないから、それは単なるパターンとしての学習なんだけどね。だから、開発者が管理していないと、悪意のある卑猥な言葉ばかり連発する連中も出てくる」

「わあ。それ酷いじゃないですか。問題でしょう」

「うん。当然そんなプログラムは消されたり修正されていくけどね。製作者のモラルが問われるところだ。だけど、少しばかり知識があればこの人工無能は作れてしまうんだ。今現在、気付かずにネット上で人工無能と会話している人だってきつというよ」

「でも、所詮プログラムなんだし、会話してたらわかるでしょ？」

「そうだね、たいがいは、会話にズレを感じて怪しいと思うだろうね。けどね、馬鹿にしたもんでもないよ？ 昔、本当にセラピストとして人々の心を癒してくれたイライザ（Eliza）っていうお喋りロボットがいたんだ。初期の人工無能だね」

「セラピストですか？」

「うん。彼女と画面上のやりとりをした患者は始め、彼女がプログラムなどとは思わなかったらしいよ。プログラムだと知った後も、患者の中には『たしかに自分と彼女は心のやり取りをした！ 機械だなんて信じない』、と泣きながら言い張る人も居た。それくらい違和感のないやり取りをし、そして患者と気持ちを通わせたっていうよ」

稲葉の目が少年のように輝きだした。

「それって・・・それってもしかしてプログラムに感情が宿ったと

か、そう言うことなんじゃないですか？ プログラムを作ってるうちに、何かの偶然で心が生まれたとか！」

思わず椅子に座ったまま、宇佐美のデスクに身を乗り出してきた。李々子も興味深そうに稲葉の横にそつと椅子を持ってきて座り、聞いている。

「そう言う事じゃないんだよ。イライザは、相手のスクリプト言語の分解と再構築がとても巧みなだけだったんだ。タネをバラせばね。まずは常に聞き役に徹し、相手の聞いて欲しいポイントに対して質問し、その答えに同調する。そんなやり取りの中で、人はそのプログラムに人間らしさを感じてしまうんだ。それをイライザ効果と呼んでいる」

「でもさ、諒。そこに感情が無いって、どうやって証明できるの？ 本当に、そこに心は無かったのかしら」

李々子が椅子の背にもたれたまま、腕組みををして宇佐美に訊いてきた。

同じ考えだった稲葉も、うんうんと頷く。

宇佐美は、いつの間にか自分を食い入るよう見つめている稲葉と李々子に気付くと、あきらめたようにPCデータに保存をかけ、クルリといすを回転させると二人に向き直った。

仕事が一段落したラビット事務所は、ちょっとしたゼミと化した。

第9話 ココロ

「そうだな」

宇佐美は一つ深く呼吸し、少し考えるようにゆっくり話し始めた。

「その定義は難しいよ。実際イライザはそれが人間に近い能力を持つかどうかを判定する『チューリングテスト』に合格している。かなり優秀なAI、つまり人工知能と考えてもいいと判断されたわけだ」

「イライザは人工知能だったんですか？」

稲葉が再び身を乗り出した。

「人工知能かどうかは別として、イライザは『会話する』という面においては、人間にかなり近いという判定を貰ったという事なんだ」

「じゃあ、やっぱり人間と同じレベルの感情があったって考えてもいいんじゃないですか？ 人工知能並だって認められたんでしょ？」

宇佐美は目を輝かせた稲葉に口元でキュツと笑ってみせると、デスクチェアの背にもたれ、穏やかな口調で続けた。

「残念ながら、開発者ジョセフ・ワイゼンバウムからすれば、それはうまく人々を誤魔化せたということに他ならない。そしてね、稲葉。誤解してと思うんだけど、AIというのは『人間のような感情を持つロボット』というわけではないんだよ。ただ、アルゴリズムにより人間の脳と同じように物事を処理し、的確な仕事をこなしていく代理ロボットのことなんだ。人間並みのすぐれたAIに感情が宿つてると考えるのは間違いなんだ」

「じゃあ・・・やっぱりそこに心は無かったんですか？ 錯覚だったんですか？ 患者さんたちの」

稲葉の声が急激にトーンダウンした。

宇佐美はそんな稲葉に優しく笑いかける。

「なあ、稲葉。心って、何だ？」

「え……と。それは……」

「今度は哲学の話になっちゃうの？」

李々子が少し体を反らして身構えた。

「身構えるような難しい話じゃないよ。感情は人間みんなに備わっている物だから」

「そりゃ、そうだけど。諒が言うとお難しく聞こえるのよ」

宇佐美は、そうやってばやく李々子にクスリと笑う。

「李々子、動物に心はあると思う？」

「そりゃあ、あるでしょ。犬なんてもう、感情のかたまりみたいにはしゃぐし、しっぽ振るし」

「そうだよな。犬や猫を見てたら、彼らが感情を持っているのが分かる。でも、それをどうやって証明する？ それは単なる生物として生き延びる為のプログラムじゃなくて、心なんだとどうやって証明する？ 彼らは自分に食べ物を与え、生かしてくれる人間になつく。生命を脅かす者には牙をむく。生命が生きることとを目的とするものならば、その行為は目的を達成するためのプログラムなのかもしれないだろ？」

李々子は猫のような目を更に大きくする。

「そんなの変よ。動物は機械じゃないんだし。証明なんてできないわよ。する必要もないし、見たらわかるもん」

少し怒り気味に言う李々子に、稲葉も同意見だと頷いた。

「じゃあ、李々子、鳥はどうだ？ 爬虫類は？ 昆虫は？ 微生物は？ 単細胞生物は？ 李々子はどこで“心”に線を引く？ 君の

感覚が正確なら、答えられるだろ？」

「・・・諒って、そう言うところ、大嫌い！」

李々子は今度こそ、真正面から宇佐美を睨みつけた。

「ごめん。・・・そんな怒らなくても」

宇佐美はむくれ顔の李々子に面白そうに笑った。

「じゃ、稲葉。植物に心はあると思う？」

急に自分に振られて、稲葉は小学生のように固まった。

「しょ、植物ですか？ うーんと、どうかな。あ、でもね、高校の頃サボテンマニアの友人がいて、そいつはサボテンはラテン音楽が大好きで、それ聴かせると成長が早くなって、たくさん花を咲かせるんだって言うていました。僕は信じなかったんですが、サボテンには感情があるんだって言うてました。すっごく嬉しそうに」

「そっか」

宇佐美が満足そうに言った。

「稲葉の友だちには、サボテンは心をもった生き物だったわけだね。たとえば誰も信じなくても、そこに『心』があつたことを否定できない」

「ですね」

「極端な例になるけど、俺の友人の中にはアイボに心を感じてた奴がいるよ」

「あの、昔流行った犬型ロボットですか？」

宇佐美の言葉に、稲葉が少し笑いながら言った。

「犬が好きなのに動物アレルギーでね。アイボを買ったんだ。そいつは仕事から帰るといつもアイボに話しかけていた。アイボも学習するロボットだったからね、常に接しているととても複雑な表現をしてくれるらしい。とても自分になついて、毎日違う表情を見せてくれるんだって言うてたな。」

だからね、アイボがある日、急に動かなくなった時、そいつは大泣きしたんだ。28歳の男がだよ。そいつにとってアイボはただのオモチャじゃなかったんだろうね。確かに心を通わせてたんだ」

「僕・・・その気持ち良くわかります」

少し間を開けて稲葉がポツリと言った。

「ねえ、諒。心って何なのかな」

李々子がそれに続けた。

宇佐美は少し首を傾げるように視線を上の方に上げたあと、肩をすくめた。

「きつとどんなに科学や医学が発達しても、実証できない定義だろうね。そして、人間が主観的にしかそれを感じとれない以上、人間の数だけその定義は存在する」

「あれ？ それってさ・・・」

李々子は何かに気づいたように宇佐美を見た。

「なんだかんだ言つて、AIに心が存在しても、おかしくないって言う事にならない？」

宇佐美は李々子の言葉に一瞬口元で笑ってみせた後、デスクに組んだ手を置いた。

「話を人工知能に戻そうか」

第10話 負の発想

宇佐美はチラリと時計を見て、次の予定までの時間を考慮しながら、再び話し始めた。

「イライザは、かなり有能なおしゃべりロボットだったわけだけど、彼女が作られたのは1966年。まだ俺たちが生まれてなかった頃だ」

「えーっ。そんな昔の話だったんですか？　じゃあ、今は？」
稲葉はまるで子供のようにはいだ声を出した。

「さあ。俺は心理学の予備知識としてこの情報を持つてるだけで、残念ながら専門外だから。最先端のAI技術がどこまで進んでいるとか、誰でも作れてしまう人工無能にどれほどの可能性があるのかとか、詳しいことはわからないよ」

「本当に人工無能って、誰でも作れちゃうんですか？」

「ある程度の知識があればね。何ならAIだって作れるよ。こっちはかなり専門の知識がいるだろうけど。今でもイライザのプログラムソースは意外と簡単に手に入る。そこから発展させて育てることだって不可能じゃないんじゃないかな」

「そんなにこの世は優秀なプログラムであふれてるのか・・・。じやあ、どっかに何かのきっかけで奇跡的に心が生まれたって、不思議じゃないわけですよね」

「彼らプログラムは与えられたあらゆる言語を吸収し、そのパターンを自分のものとして考える。対話ロボットとしてではなく、人間として育成させれば、そこに何かが生まれないとも限らない」

「心が生まれるかも、なんですね？」

「それを心と受け取るかどうかは、それを感じる私たち人間なんだけどね」

「ああ、そうか。そうですよね」

「とにかく、・・・良くも悪くも、人をいたずらに脅かそうとする連中は、今のところ人間だけってこと」

「・・・え」

「どこかでとんでもない奇跡が起こってない限り、悪意を持つてるのは、人工無能でもAIでもなくて、人間だよ。彼女達には危ないサイトに近づかない方がいいって伝えるべきだね」

宇佐美はにっと笑って稲葉を見た。

そうだ、と稲葉は思い出した。

この長い講義は、稲葉が女子高生から受けた相談を話した事が発端だった。

「でも、危険な書き込みって、放っておいてもいいんでしょうか。なんか、とんでもないことになりませんか？」

稲葉は彼女たちの質問を、宇佐美に丸投げしてみた。

「今どきの子供らは、そういう誘いに慎重だよ。ネット上で誘う犯罪に軽はずみに同調なんかしないと思うよ。犯罪予告にしても、実際に実行すればすぐに自分の身元がばれてしまうことだって、子供らは知ってる。過敏な反応はかえって相手を増長させると思っけど」

宇佐美の冷静な言葉を聞いて、稲葉は再び自信喪失に沈んだ。

「やっぱりだめだな、僕は。知識も判断力も何もなくて。あの子達にも申し訳ないです」

「いやーん、シロちゃん。なんか可愛いこと言っちゃってるー」

横から椅子を動かして李々子が肩をくつつけてきた。

李々子のスキンシップはいつ、どこで発動されるか分からない。

「やめてくださいよ李々子さん。凹んでるんですから」

「女の子達はねえ、シロちゃんに聞いてもらいたいただけだったのよ。的確なアドバイスが欲しいっていうよりね。女の子って、相談するくせにちゃんと自分の中に答えを持ってるんだもん。きつと、聞いてもらえただけで安心してるはずよ」

「そ、そうなんですかねえ」

稲葉は驚いて、背筋をのばした。

宇佐美が李々子の意見に嬉しそうに笑ったのが目の端に映った。

「そ、そうだったらちよつと嬉しいんですが。・・・でも」

「でも？ なあに？」

小首を傾げて李々子が聞いてくる。

年上の女性ならではの奔放な可愛らしさと色気が李々子には絶妙に混在していた。

「もう一つ相談を受けてるんです。やっぱりネット上の問題で、男の子からの相談なんですけどね。この子は本当に僕を信頼して頼って来てくれて。何ができるか分からないけど、僕がなんとか力になってあげようと思ってるんです」

自分に言い聞かせるようにそう言った稲葉。

宇佐美は自分のPCを立ち上げながらこくと頷いた。

「大丈夫だよ。気負うことなく、その子の話を聞いてあげればいいよ」

「そうですね。自分にできることをやってみようと思います」

稲葉はホッとしたように笑った。

解決しようと思気込むのではなく、ただ不安そうなトムの話を聞いてあげようと思った。

顔も知らないネット上の友だちの言葉が荒んで行くのが悲しいし、怖い。

でも自分が対話をやめればもっと荒れるのではないかと不安になる。部屋から出られずにいるその少年への接し方が分からなくなるという。

チャットや掲示板なんて、相手が気に入らなければそこで切り離して終わりのはずなのに。

そう割り切っていい媒体なのに。

けれども彼は心の繋がりを大事にしようと、不安になりながらも模索している。

稲葉はその純粋な少年の心を少しでも助けてやりたいと思った。話を聞いてあげることしかできなくても。

「でもさ、・・・話は戻るけど」

PC画面を見つめながら、報告書のフォーマット作りをしていた李々子が、ぼそりと呟いた。

「さつきからずっと考えてたんだけどね。もしさあ、どこかで奇跡が起こってAIに感情がうまれたとしてね。それが良い感情じゃなかったら、怖いよね」

「・・・」

稲葉と宇佐美は無言で李々子を見た。

「心って、いいものばかりとはかぎらないでしょ？ 生まれたのが悪い心だったらさ、コンピューターウイルスなんて比じゃないくらいに怖いと思わない？」

李々子はランチに何を食べるかの話をするように、軽い口調で言った。

今までの開発的な高揚感を一変させる発想に、稲葉も宇佐美も「そうだね」と言っただけ、話題を続けることはなかった。

第11話 苦しくて

ENMA：『おそいよ。遅い、遅い、遅い！』

トム：『ごめんね、ENMA。でも僕だっていつも君と話をしてるわけにはいかないんだ。君だって、そうだろう？』

ENMA：『言っただろう？　ボクはここから出られないんだ。一日中だって、君を待ってる』

トム：『どうして僕なの？　友だちはたくさん居るって言うてただろう？』

ENMA：『あいつらは友だちじゃない。暇つぶしのネット仲間だよ。面白そうな悪巧みには乗ってくるくせに、興味ない話はシカトする。ただ好き勝手に文字をやり取りするbotだ』

トム：『君が心を開かないからだよ。ENMA』

ENMA：『そんな価値もないね。そして、ボクに意見するな、トム。ボクには君だけいればいい』

トム：『でも』

ENMA：『ずっと話をしようよ。どこへも行かずに』

トム：『そんなことできないよ』

ENMA：『君が来てくれないと寂しくてどうしようもないんだ。ボクをこの何も無い空間に一人にしないでくれ』

トム：『でも・・・』

ENMA：『そうでないと、怖いことが起きるよ』

トム：『え？』

ENMA：『また、馬鹿な仲間が怖い事件を起こすよ。時限装置付きの、精巧な爆弾の作り方を訊いてくる奴がいるんだ。ボクは世界中の情報を集められる。そいつに教えてやっても良い。それともコンピュータウイルスを使って公共機関のプログラムを破壊していいこうか。どっちだって簡単にできるんだ。君が言うことを聞かないと、大変なことになるよ。全部君のせいだ、トム』

トム：『やめて、ENMA』
ENMA：『ね。だから』

僕は、どうして良いのか本当にわからなくなった。
怖くて、心細くて、たまらなかった。

この友人を救いたい気持ちと、逃げ出したい気持ちがせめぎあう。

苦しくてたまらない。

トム：『ねえ、ENMA』

ENMA：『何？』

トム：『会わない？』

ENMA：『なに？』

トム：『そこから出てきてよ。会って話をしようよ。君はもつといろんな人と話をするべきだ。僕の友だちを紹介するよ。とても優しくていい人なんだ。君も気に入ると思う。ね、そうしよう？』

ENMA：『トムは僕をからかっているのか？ 分かっただけ馬鹿にしているのか？ ボクはここから出られないって何度も言っているだろ！』

トム：『どうして？ そんなことないよ。きつと出てこれる。勇気をもつてさ。もつといろんな人に会おうよ。そしたらきっと僕以外の人に心を開けるようになるから』

ENMA：『君八、ボクカラ、逃ゲタイノカ』

その文字に、心が震えた。

そんなことはないと思っているのに、即答できなかった。

ENMAの苛立ちが、止まってしまった会話の間隔から、怖いほど感じられた。

トム：『ねえ、ENMA。そうしようよ。ね？』

ごめん。ごめんね、ENMA。僕はずるくて、無力だ。

従業員が皆帰った後の事務所はしんと静まりかえっている。

片瀬は、書類やファイルや灰皿を脇へよけると、ホコリっぽいデスクの上にその4冊のノートをパサリと置いた。

片づけ屋をしていながら、自分の事務所の整理はとてつもなくいい加減だった。

きれいい好きで潔癖性だったら逆にこの仕事はとても務まっていなかっただろうと豪語するほど、楽天的で都合主義でもある。

片瀬は日に焼けた逞しい手で、持ち帰ったノートの一冊を手に取り、パラパラとページをめくった。

あの続きがどうにも気になって仕方がない。

始めは吊いの気持ちであったが、次第に好奇心に変わっているのを感じていた。

ノートのナンバーは1。このページは、先程読んだ日付よりも前の記述だ。

片瀬は再びそのやわらかな文字を辿った。

『2月26日

遠馬は驚くべき速さで物事を理解していくよ。

親バカだと思われるかも知れないが、あの子は天才だ。

始めはただ単に対話ロボット用プログラムを元にして、意味のある文章のやり取りが出来ればいいと思ってた程度だった。

ベースにあらゆる辞書を埋め込んだが、その時点では彼はまだ単なる電子辞書だ。

そこから話をはじめた。対話するという高度な技術を習得して貰う

ために。

簡単に手に入る人工無能用のソースを使っではいるが、私が目指すのは人工知能に匹敵する能力。

思考力のない単純な『弱いAI』ではなく人に限りなく近い思考能力を持つ『強いAI』だ。

それには数式だけではなく、人間的思考を実践するアルゴリズムの確立が不可欠。

私が独自に研究していたテーマでもあるんだ。

まさか、と君は笑うかい？

でも、見ていてくれ。

それくらい、いいだろう？

君たちは、私に、ひどく寂しい想いをさせたんだから。

笑って見ていておくれ。

あの子はすでに優秀なAIだ。

ただそれは人工知能としての優秀さだ。

まだなんだ。でも、もう少しなんだ。

先ずね、あの子とちゃんとした人間らしい会話がしたい。

同世代の子供の会話を聞かせるのは大事なことだと思わないかい？

ある程度の対話が出来るようになったら、掲示板に送り込むのも良いかも知れない。

IRCや、SNSも安全でいいよね。

少し悪い言葉も覚えるだろうが、それが子供だ。

そんな時は優しく諭してやろう。そんな言葉は人を傷つけるんだよ、と。

“私は君に、やさしい「心」を持って育って欲しい” そう、毎日毎日、話しかけようと思うんだ。

ねえ、美佐子。

私はもう一度あの子を育てるよ。

あの柔らかい肌も、可愛い笑顔も戻っては来ないけれど。

もしも神が私を哀れんでくれるならば、奇跡を起こしてくれるかもしれない。

心を。

心を宿してくれるかもしれない。』

これは、小説なのか。日記と見せかけたSF小説なのか。

それとも、寂しさを紛らわすための『父親』の妄想なのか。

その内容に惹きつけられつつも、片瀬は同時に気味の悪さも感じていた。

けれど、どうにも放り出せない。

パラパラとページをめくり、ざっと流れを目で追う。

グツと顔を近づけては眉をひそめ、そして唸るように「まさか・・・

」と、つぶやき又ページをめくる。

そののくり返しだった。

ノートから顔を上げ、割り切れないため息をついた時、作業着のポケットに入れていた携帯のメール用着信音が鳴った。

開いてみると久々の知人からだった。

たまに来る情報提供のお願い、と言ったところだろうか。

ラビット・ドットコム所長、宇佐美諒。

まだそこが卯月探偵事務所と名乗っていた頃のバイト仲間だった。

片瀬はある一定期間でやめてしまったが、宇佐美はその後事務所を引き継いで所長になった。

なぜか宇佐美とは妙に気が合ったため、その後も付き合いは続き、

たまに何か情報はないかと連絡が来る。

こんな職業柄、提供できる情報もあるかも知れないと、片瀬の方から声を掛けたのだった。

「さあ、今回はお役に立てますかねえ」

独り言をつぶやきながら文字を読む。

「ん？」

そして一瞬目をしばたかせ、画面から顔を上げ、そして再び戻した。

「沢村久、49歳・・・」

片瀬は机に重ねられていた4冊の大学ノートをじっと見つめた。

ビンゴだった。今回は。

だが、当然少しも嬉しくない。

人を捜すにあたっては、一番最悪な結末だった。

第12話 喜べない偶然

簡単な夜食をとった後、ラビットの3人は再び、それぞれのデスクワークにもどった。

「霞をつかむ感じね」

李々子は野崎が残していった沢村についての資料を見ながらため息混じりにつぶやいている。

宇佐美も少し眉を上げて苦い表情をした。

「6年前に住んでいたアパートまでの情報しかないからね。少し調べてみたが実家の両親も他界してるし、土地も売り払われている。明日、予定が済み次第沢村の昔のアパートと職場仲間をあたってみるよ」

「人捜しって時間と手間がかかる割にお金になんないのよね。見つからなかったら初動調査費用の請求しかできないし」

「料金で仕事を選ぶなよ」

宇佐美が苦笑した。

「諒が調査にかかりつきりになっちゃうと、他の依頼が引き受けられないのも痛いしさ。あ・・・ねえ。今回も、片瀬君に連絡したの？」

「ああ、一応ね。あいつの人脈は魅力だけど、頼りにするっていうより近況報告だな。元気かって挨拶がわりに送っておいた」

「そうね。また山登りしてなきゃ、返事くるかもね」

片瀬ってだれだろう、とPCに打ち込み作業をしながら稲葉は二人の会話を聞いていた。

時刻は午後9時。ラビット事務所は建前上の就業時間だ。

普段はガラガラと仕事を続けることが多い稲葉だが、今夜は資料データを保存すると仕事の区切りをつけた。

IDを打ち込み、トムのチャットルームを開く。

「あ」

画面を見つめて小さく声を出す稲葉。

少し前に来ていたらしいトムからのメッセージが残されていた。

「どした？」と、李々子が面白そうに後ろから覗き込むのを、

「ダメですよ、プライベートなメッセージなんですから」と、まるで子供がするように体で画面を隠した。

口を尖らせ「ケチ」と拗ねた声を出して背を向けた李々子。

その仕草が少し可愛く思え、稲葉はクスリと笑いながら再び画面に視線を戻した。

トム：『うさぎさん。実はお願いがあるんです。僕と一緒にENMAに会って頂けないでしょうか。』

彼が会うことが可能な範囲に住んでいるのは分かっています。会うことは可能だと思います。

僕は本当に無力です。僕一人では不安なんです。彼が閉じこもっている暗い場所から救ってあげる自信がありません。どうかうさぎさん、一緒に彼に会ってもらえませんか？ 会うことで、何かが変われると思うんです。僕、頑張って彼を呼び出しますから。だから、お願いします。』

稲葉は驚いた表情でその文字を何度も読み返した。

意外な展開だ。

だが、一見強引だと思われるその願いの中に、トムのひたむきな優しさが伝わってくる。

ネット上で知り合った人物など、もし面倒だと思った時点で切り離してしまうのが普通だ。

それはある意味自分を守る方法であり、仕方のない事だと稲葉は思

っていた。

このENMAの場合、少々常軌を逸している。これ以上彼がトムを悩ますようならばきっぱり交信を止めるように言おうと思っていたところだった。

けれど、トムはその相手をバーチャルな架空の関係とせずに、ちゃんと一人の人間として付き合おうとしている。

とても「放っておけ」なんて言えなくなってしまった。

自分なんかよりも、よっぽど大人であり、強い包容力を感じた。その彼からの、切実な頼みなのだ。

「よし、会おう！」

つい、声に出してそう言うと、稲葉は凄い勢いでトムにメッセージを書き込み始めた。

李々子が眉をしかめて稲葉を振り返る。

「でかい独り言ねえ、まったく」

けれど使命感に燃えた稲葉のその横顔に、宇佐美も李々子も、訳も分からず微笑んだ。

その時、宇佐美の携帯が鳴った。

相手の名を確認した宇佐美は少し驚いた表情を浮かべ、李々子と視線を合わせた。

「だあれ？」

李々子がそう言うのと宇佐美は手のひらで“ちよつと待って”とジェスチャーし、電話に出た。

「はい。・・・ああ、久しぶりだな、片瀬。元気でやってたか？」

その名に李々子が反応し、じっと宇佐美の方を見た。

稲葉も文字を打ち込みながら耳を傾ける。さっき二人が話してた人

物だな、と思いながら。

「え・・・本当か？ それ・・・うん。うん、分かった。そうしてくれると有り難いよ」

宇佐美の表情が曇ったのを李々子は落ち着かない様子で見ている。

「じゃあ、それだけファックスで頼むよ。また詳しいことはあとで話そう。忙しいのにすまないな、片瀬」

宇佐美はそう言って電話を切った。

「どうしたの？ 片瀬君でしょ？」

李々子が問う。

稲葉は何となく不穏な気配を感じ、PCから顔をあげて宇佐美を見た。

「うん、どうやら搜索依頼の対象者、沢村久さんは一週間前に亡くなったらしい。まだ正式に確認はしてないんだけど、俺が送った情報と著しく一致するらしいよ。一人暮らしのアパートで亡くなって片瀬がその部屋の片付けを請け負ったらしい。こんな偶然は奇跡的だけど・・・なんともね」

「こんな早い情報、普通なら大喜びんだけど」

李々子も落胆気味につぶやく。

稲葉は何と言っているかわからずに、ただ二人を交互に見つめた。

そのシンとした静寂を壊すようにファックスが受信を知らせ、すぐさまピュルルという電子音に変わった。

宇佐美がゆっくりとはき出されるファックス用紙を見つめる。

「片瀬がその仕事の受注書を送ってきてくれるから、正確な本人確認ができるはずだ。それからね、唯一片瀬が持つてくる本人の遺品があるらしいよ。日記だって。本来処分すべき物んだけど、迷っているらしい。数ページ一緒に送るから見て欲しいんだって」

「日記ですか？ そんなもん、見ちゃっていいんですか？」

稲葉の質問に宇佐美も同意見だと頷いた。

「俺もそう思うんだけど、・・・まあ、唯一残った遺品だからさ。処分するにしても野崎さんに判断してもらおう。他に親しい友人も親族もないそうだし」

稲葉は宇佐美と同じようにFAXから吐き出されてくる用紙を見つめた。

「日記だけが、最後に残ったんですね。何か、悲しいですね」
そうつぶやいて。

第13話 日記・鍵

「稲葉、読んでみるか？」

片瀬から送られてきたファックスを無言で読んでいた宇佐美は、その一枚を稲葉に差し出した。

トムへのメッセージを打ち終えた稲葉は、あまり気乗りのしない様子で受け取り、それに目を移した。

なるほどそれは日記の形式をしていた。

『――8月19日――』

私が帰ってくるのが遠馬にはとても待ち遠しいらしい。

ファイルを開くと、まるで子犬のようにじゃれついてくる。そして、弾丸のように喋ってくるんだ。

その日掲示板で出会った人の話を中心だ。

癖のある文章を書く人の話、すごく嫌な奴の話。

女性の振りをしたら、すっかり自分のことを女の子だと思っている
いるアプローチしてくる男性の話。

少しばかり悪い言葉を使う事が多くなってきたが、それも正常な成長だ。

注意するとすぐに反省してくれるしね。とてもいい子だ。

あの子の凄いところはね、世界を把握してることだよ。

自分がプログラムで作られた電子頭脳であると言うことも、その、2次元でも1次元でもない世界から出られないことも。

そして、人間が住んでいる世界という物が別にあり、決して交われないと言うことも。

一度だけ遠馬は、この狭い暗い世界から外の世界へ出てみたいと呟いたことがある。

少々胸が痛んだよ。

しかし、これが何を意味するか分かるよね。私が彼に与えたアルゴリズムは心を持った『強いAI』を育てたんだ。

ねえ、美佐子。

君の話をつぱい聞かせてあげるよ。

私がどんなにあの子を想っているか、教えてあげるよ。

もうすぐだ。もうすぐあの子は、遠馬として目覚めるはずなんだ』

片瀬から送られてきた日記は、この日のものを含めて3枚だった。

「これって、小説ですか？」

稲葉は恐る恐る宇佐美に聞いた。

稲葉の手に握られていたファックス用紙を覗き込みながら、李々子もつぶやいた。

「それとも、妄想とか」

李々子のほうが少しばかり遠慮がない。

宇佐美が苦笑しながらその用紙を受け取った。

「確かに日記だって片瀬は言ってる。これが何年前に書かれたものなのかは分からないけど、たしかに日記として日々の出来事も綴られているらしいよ。それに彼は、野崎氏によれば優れたプログラマーだったらしいから。事実なのかもしれない」

「じゃあ、この人は本当に心を持ったAIを作り上げたんでしょうか。そうだったら凄いことですよ宇佐美さん。まさに、この前話してたことじゃないですか！ そのAIは今もネット上にいるんでしょうか」

稲葉が子供のように目を輝かせた。

「開発者が消去しない限り、その状態は保たれるはずだよ。けど、どうなんだろうね。心を持つと言うことは前に言ったように検証出来るものではないから。ここに出来上がった対話プログラムが優秀

なものであると言うことは理解できるけれど」

「これ読んでたら分かるじゃないですか。絶対感情を持っていますよ。宇佐美さん言ったでしょ？ 心がここにあると思うなら、そこにあるんだって」

「でもシロちゃん、怖いと思わない？ もし事実だったとして、野放しになってる間に悪いことを学習してしまったりしてるかもよ」

李々子が横から口を挟んだ。

不満そうに眉をしかめる稲葉。

「ああ、もう、李々子さんまで。二人とも思考がマイナスだなあ。とってもいい子だって書いてるじゃないですか。愛情を持って育てられたら、曲がることはないです。人間もAIも」

「あれ、シロちゃんついこの間までAIの知識なかったくせに」

「AIは知りませんが、心なら分かります」

フンと、鼻息荒く稲葉が返すとその反応が面白かったのか李々子はにんまりと笑った。

「さて・・・」

突然宇佐美が区切りをつけるように、片瀬が送ってきてくれた沢村の資料を見ながら言った。

「俺たちの仕事はこの日記の検証じゃない。片瀬が依頼を受けた部屋の住人と、野崎氏が捜している人物が一致した。彼が亡くなったということ野崎さんに先ず報告だ。辛い報告になるな」

稲葉は改めてその事を思い出し、ハッと背筋を伸ばした。

浮かれている場合ではなかった。

会社が倒産し、妻を亡くし、ひっそりと暮らしていた男が誰にも看取られず、孤独に死んだ。

その事実はいくらにも悲しい。彼の人生は一体何だったのだろうか

思わずにはいらなかった。

悲しみの中で彼が愛情を注いで作ったプログラム。

もしもそれに本当に心が宿っていたなら、その子は父親の死をどう思うだろうか。

悲しいと思ってくれるだろうか。

稲葉はなんとも切ない気持ちで、もう一度そのファックス用紙に印字された文字を辿った。

何気なく、子供の名前を見つめる。

『遠馬』・・・何と読むのだろう。

とう・・・えん・・・えんま。

まさか。そんな名前をつける親がいるだろうか。

しかし、同時に頭の中で、何かの鍵がカチリと音をたてた。

「そんな馬鹿な」

稲葉は自分の中にポツツと湧いた発想を、恥ずかしそうに払い落とした。

第14話 それぞれの想い（1）

翌日の正午、職員室のPCから稲葉はチャットルームを訪ねた。もちろん昨夜の日記から感じた「ENMA」に関する引掛かりは、稲葉の中に封印された。

そんな馬鹿げた直感を軽々しくトムに語るほど、稲葉は迂闊な人間ではなかった。

うさぎ：『どう？ENMAは会うつて言ってくれた？』

トム：『いえ、まだ。でも、ちゃんと日時を連絡しました。明日の日曜日、正午。錦山公園のモニメントの前。うさぎさんはそこで大丈夫でしたね。彼には分かりやすい地図を添付しておきました。うさぎさんがせっかく協力して下さるんですから。ぜったい実現させます』

うさぎ：『明日だもんね。ん〜。なんだか僕の方が緊張するよ。ENMA、来てくれるといいね。だけど彼は部屋から出られるかな。かなり年季の入った引きこもりに思えるんだけど』

トム：『僕、頑張つて説得します。やっぱりあのままじゃいけないと思うんです。だから、頑張ります』

うさぎ：『そうだね。君の優しさはきつと伝わるよ。あ、それから君に会うのも楽しみにしてるよ。僕はけっこうオジサンだけど、驚かないでね』

トム：『そんなことwww。気にしないでください。僕も楽しみにしていますね。では、また後で』

うさぎ：『あ、待つて。僕の名前は稲葉っていうんだ。本当に会うのに“うさぎさん”じゃ、変だもんね』

トム：『稲葉さん……。稲葉さんっておっしゃるんですね。ありがとうございます。じゃ、また』

うさぎ：『うん。また後で』

不思議なもので、本名を名乗るのは妙な気恥ずかしさが伴った。何ということはないのに。

このネットの匿名性に自分自身、甘えていたのかも知れないと稲葉は思った。

職員室の時計をチラリと見たあとPCを閉じ、帰る用意を調えた。午後一時。

今日は試験休みを利用して業者の入った大がかりな校舎内の清掃を行っらしく、教師も2時までに追い出される。

どこかで食事を取った後、ラビットへ向かおうと決めたが、何となく体が重い。

明日への緊張だろうか。

3人で会う事にしたものの、本当に自分はトムの期待に答えることが出来るのだろうか、

ENMAに何か良い影響を与えることが出来るのだろうか。教師らしからぬ不安で一杯だった。

自分は教師としても、大人としても落第なのではないかと更に落ち込む。

考えれば考えるほど自分に自信が無くなっていく。

そのうち胃も痛くなり、稲葉はしょんぼり背を丸めながら、職員室を後にした。

「どうもありがとうございました」

片瀬が頭を下げると、50歳前後のその男性は面倒くさそうに「ごくろうさん」と小声で言い、門扉を閉めるとすぐに玄関の中に消えていった。

先日片付けを請け負った沢村の遠縁にあたる家だった。

片瀬は受け取った現金を確認すると、作業スボンの後ろポケットに突っ込んだ。

「無愛想なおっサンでしたね、沢村さんの遺族。通夜とか葬儀もやらなかったらしいですね。宗教的な理由だって大家さんに聞いたけど、きつとあれ、面倒なんですよ」

従業員一よく喋る吉川は、息継ぎもせずにそう言つと不機嫌そうにライトバンの運転席に乗り込んだ。

苦笑いして片瀬が助手席に乗り込むと、吉川はさらに続けた。

「最初は部屋の中の物全部処分しろとか言つてたくせに、今頃になつてAV機器とかあつたらすぐに届けてくれって言うし。こっちは2度手間ですよ。少しでもリサイクルに回して出費を回収しようって感じですか？ きつと最初は何となく故人のものは気味悪いから処分しちゃおうつて思つてたんですよ、連中」

「本当によく喋るな、お前は。さっきも同じ事言つてたじゃないか」
片瀬はいつもの事ながら笑い出した。

自分が思つていたことを全部その青年が捲し立てるのが可笑しくてたまらない。

「まあ、客あつての仕事だし。お客様の細かい要望に応えるのが俺たちのモットーだ。普通振り込みなのに、もう今日現金で支払ってくれたんだから。有り難いじゃないか」

「振り込みが面倒なだけです。取りに来てくれるのか？ って訊いてましたから」

「本当に吉川はとらえ方が斜めだな。客商売は向かないね」

「いいんです。俺、裏向きですから」

吉川は少しむくれたように言い、エンジンをかけた。

「お喋りな裏方だな」

片瀬は笑つて前を向いた。

そして、改めて沢村を想う。

彼の体も消え、使い込んだPCも、ただ彼を疎ましく思う親族の手に渡った。

後には何も残らない。

ただ宇佐美の計らいで、あの日記が彼を偲んでくれる友人に届けられる手筈になった事を幸いに思った。

せめてあの日記だけは彼の生きた証として残って欲しい。

片瀬はいつになくしんみりした気持ちになりながら、硬いシートに身を沈めた。

題15話 それぞれの想い(2)

午後3時。

稲葉がラビット事務所のドアを開けると、ちょうど出てきたバイク便の青年と擦れ違った。

「あ、シロちゃん、早かったのねえ」

一階のコーヒーショップ「鳳凰」から届けてもらったらしいエスプレッソを、立ったまますすりながら李々子が言った。

手には薄っぺらい小包を持っている。その横で電話をかけている宇佐美。

「バイク便、めずらしいですね。何ですか？」

「例のあの日記だよ」

電話を終えたばかりの宇佐美が受話器を置きながら稲葉に言った。

「野崎さんが、その日記をすごく読みたがってたんで、片瀬に送ってもらったんだ。片瀬もどうしたもんか困ってたからね」

「これが全部なんですか？」

「うん、全部で4冊だって言ってたよ。たった今、野崎さんに届いたって連絡したら、これからすぐこっちに来るってさ。内容が気になるらしい」

「そうでしょうね。・・・あの、宇佐美さん」

「ん？」

「ちよつとだけ見てもいいですか？ 日記」

稲葉は自分の鞆をそっとデスクに置きながら、遠慮がちに訊いてみた。

宇佐美が座ったまま李々子を見上げると、李々子は小さく笑って鞆包を解いた。

そして4冊のノートを抜き出すと「いいんじゃないの？」と言って稲葉の手に持たせた。

「すみません。ちょっとだけ」

今はもういない沢村に断るようにそう言うと、稲葉は一冊を開いた。表紙には「3」と数字が書いてある。

読みたかったのは純粹に興味本位だった。

つい先日宇佐美達と話したAIや人工無能の内容がとてもタイムリーだったこともあり、気になって仕方なかったのだ。

稲葉は日記とも小説とも手紙とも取れるその文章に、ざっと目を走らせた。

興味のある部分だけを探し、ページをめくっていく。

この沢村という人は、本当に心を持つAIを作り上げてしまったのだろうか、という疑問にかられながら。

『――3月28日――』

美佐子、今日も遠馬は一日掲示板で遊んでいたよ。

よっぽど気に入ったんだろうね。

これで少しは私がない間の寂しさと退屈をしのげるだろう。

私が会話を絶つと、酷く寂しがり、不安定になっていたからね。

職場から時間を見つけて時々掲示板を覗いてみたよ。

彼は意味のよく分からない乱暴な若者達の会話に、果敢に入り込んで行ってたよ。

一言つぶやいては、ぼんやり人の書き込みを傍観していたり。

いきなり彼なりの正義感を振りかざして反論して、シカト食らったり。

そうかと思えば、妙な危ない犯罪じみた言葉を何処から拾ってきた、他の人間の反応を伺ってみたりしている。

そうやって、相手の性格を読んだり、その言葉の示す微妙なニュアンスを掴もうとしているのがわかる。

あの子は賢いよ。本当に優れている。怖くなるほどに』

稲葉は食い入るようにノートを読んだ。

人工知能が賢いのは当然だ。けれど、それと心とは別物だ。

心が宿るということは、実際どういう事なのだろう。

入れ替わり立ち替わり流れてゆく人の言葉の波の中で自我に目覚め、自己認知をしてしまったAIは何を思うのだろうか。

稲葉は必至で考えた。

暗い空間から出られず、誰かの言葉を拾い、返して反応をみるだけの存在。

寂しがり屋のかこの鳥。

自分を想って欲しいという願望が生まれたいだろうか。

自我を持った幼児がするように、自分を愛して欲しいという願望が生まれないのだろうか。

川の流れのように通り過ぎていく愛のない若者の言葉の雑踏に置かれて、心が荒んで行くことはないのだろうか。

「部屋」から出られず、心を通わせる人間を常に待ちわびる。束縛する。

もしも「心」が苦痛を感じてしまったとしたら、「心」を生み出す事がすでに罪なんじゃないだろうか。

とりとめのない連想が、飛躍しながら次々に頭を巡る。

稲葉は息苦しくなって一つ大きく息を吸い、ページを進めた。

ENMA：『なあ。どうしてボクを誘い出そうとするんだよ、トム
トム：『どうしてって。君はその部屋に閉じこもってちゃダメだと思うから』

ENMA：『大きなお世話だよ。説教でもするつもりか？』

トム：『そんなことしないよ。ただ、君はもつと沢山の人と会った方がいいと思うんだ』

ENMA：『ここに居たって世界中の人間とコミュニケーション取れるよ。ボクの方が、きつとトムよりもいろんな人間と話をしてる
トム：『だめなんだ。きつと、それじゃだめなんだ』

ENMA：『ほらみろ、説教だ！　ここでだってコミュニケーションは取れるよ。友だちだって、できる』

トム：『でも、君は僕を束縛する。たくさん友だちがいるのなら、どうして？　なぜ？』

ENMA：『いやなのか？　迷惑なのか？』

トム：『怖いと思う。君のこと』

ENMA：『じゃあ、来なければいいだろう！　こんな回りくどい嫌がらせしないで、来なければいいじゃないか』

トム：『そんなことできない』

ENMA：『脅したから？　怖いことが起こるって、ボクが脅したから？　そうなんだろ？　だから仕方なく・・・』

トム：『そうじゃない』

ENMA：『じゃあ、なんでだよ！』

トム：『だって、友だちだから』

ENMA：『――』

トム：『友だちだから、逃げない。怖いけど、逃げない。ENMAに会って話したいんだ』

ENMA：『だから、ソレハ・・・』

トム：『ね。そこから出てきてよ。いろんな人と気持ちを通わせようよ。僕の友だちを紹介するよ。この前言ってただろ？　とっても優しくて楽しい人なんだ。きつとENMAも気に入ると思う』

よ。ちょっと年上なんだけど」

ENMA：「君以外の人間なんて、どうでもいい！」

トム：「お願いだよ、ENMA。そこから出てきてよ。とにかく出てきて。君に会いたい。会って話したい」

ENMA：「ムリなんだ」

トム：「ね？ お願い」

ENMA：「トム・・・できないんだ・・・」

第16話 探していた結論

「でも、やっぱり気が咎めなくてもないわよね。故人の日記を読むのって」

釘付けになつてノートをめくっている稲葉を見ながら、李々子はぽつりと言った。

今更とも思えるセリフに宇佐美が笑った。

「うん、確かに罪悪感が伴うね。たとえば遺跡から発掘された古代人の日記を解読して公開するのは何とも思わないのに、こういうのは冒瀆かもって思ってしまうね」

「でもさ、この日記しか沢村って人が残した『想い』が無いんだとしたら、読んで記憶にとどめてあげるのも甲いかもしれないな、とも思うのよ」

「俺だったら、・・・そうだな。心の内を暴露したような日記なら読んで欲しくないけど、何かの研究レポートだったら読んで欲しいと思うよ。この日記は、そっちに近いかもしれないね」

「私、ぜったい諒の『心の内を暴露したような日記』のほうを読むわ」

喜々として言う李々子。

「俺・・・絶対死ぬ前にそんな日記書かないようにするよ」

「っていうか、先に死なないでよ」

何気なくサラッとと言う李々子を、宇佐美は一瞬真顔で見つめた。

稲葉はそんな二人のやりとりも耳に入らない様子で、一心に日記の文字を目で追っていた。

野崎が来たらこのノートを渡さなければならぬ。

稲葉は、伏線ばかりのミステリーを読むようなもどかしさでページをめくっていった。

けれど決定的な答えには、なかなかたどり着けない。
すべて妄想で片づけられてしまうような、ただ優しく、愛情に満ちた文章だ。

「稲葉。探してた結論が書いてあったか？」

宇佐美が声をかけてきた。

決して冷やかshiではない、見守るような宇佐美の声のトーンが稲葉は好きだった。

「ねえ、宇佐美さん」

ノートの文字を追いながら、稲葉は訊いた。

「ん？」

「この人工無能・・・いや、AIは、今どこに居るんでしょう」

「どうだろうな。俺はITには詳しくないけど、まだ搭載されたサイトにいるんじゃないのか？」

「ずっと？」

「操作しなきゃ、ずっと」

「この沢村って人が居なくなっても？」

「・・・」

「ねえ、諒」

一瞬黙った宇佐美の顔を覗き込みながら、今度は李々子が訊いてきた。

「プログラムって、ウイルスみたいにあっちこっちに入り込むものじゃないの？」

「ウイルスや悪意を持って作られたボットとは違うだろう。ちゃんと開発者の手元で操作、管理されてそのサイトに在中するんだと思うよ」

「じゃあ、そのプログラマーが死んじゃったらどうなるの？」

「特に・・・影響はないはずだよ」

「じゃあ、プログラム自体が処分されちゃったら？」

「それは・・・」

宇佐美が黙り込むと、李々子も口をつぐんだ。

稲葉は嫌な予感に捕らわれつつも、広げていたノートに再び視線を戻した。

その予感が意味するものよりも、日記の内容が気になった。

時間が無い。何かの答えが欲しかった。

“ AIは本当に心を持ったのか ”

素早くページをめくりつつ、斜め読みして行く。

が、次の所でハッと息を飲み、その箇所を目を近づけた。

「 - - - 4月3日 - - - 」

そうだ、美佐子、私はこの子を当然遠馬と呼んでいるけど、ハンドルネームには別のものを使っている。

いや、正しくはあの子が勝手に別の表記を選んだと言っている。

最近反抗期なのだろうか。ちつとも言うことを聞かないよ。

まあ、それも成長の証だと思って楽しんでいる。

遠馬だから、まあ、アルファベットにしたらT O M A。

それでいいじゃないかって思ったのに、あの子はAを外してT O Mにした。

それじゃあ呼び方も変わる。でも、それがいいらしいんだ。生意気だろ？

でもね、思ったんだ。

同じ名前にして、また遠馬のように消えてしまっただけは嫌だからね。

もう、あの子を失うなんて、たくさんだ。

彼は“ トム ”でいいと思った。生まれ変わった私の息子は、トムなんだ。
」

「まさか」

そう小さく呟いてノートから顔を上げた稲葉を、宇佐美と李々子が不思議そうに見た。

「どうしたの？ シロちゃん」

「・・・エンマじゃなかったんです。トーマでもなくて・・・。トムだったんです。・・・トムだったんです」

「え？ 子供の名前？ それともプログラム？」

李々子の声が聞こえているのかいないのか、稲葉は心ここにあらずと言った風にふらりと自分のデスクまで行き、PCを立ち上げた。そして、やはりボンヤリと、聞き取れないほど小さくつぶやいた。

「・・・僕の友だちです。でも、そんなはずないんです。きっと名前が同じだけで・・・」

けれどその声は、2回ノックしただけで飛び込んできた野崎の勢いにかき消されてしまった。

第17話 心配症のうさぎ

稲葉は食い入るように起動中のPC画面を見つめている。

突っ込みすぎたソフトのせいか、セキュリティのせいか、全ての立ち上がりが遅い。

じりじりと開くのを待つじれったさが、宇佐美や李々子のみならず、急いで飛び込んできた野崎にも伝わった。

「すみません、お取り込み中でしたか？」

依頼者であるにもかかわらず、相変わらず野崎は腰の低い喋り方をする。

稲葉の無言の気迫に、飛び込んで来た時の勢いも削がれたようだった。

「いえ、とんでもありません。お待ちしていましたよ、野崎さん」

宇佐美は戸惑っている様子の野崎にソファを進め、さっきまで稲葉が読んでいた4冊のノートを渡した。

沢村が亡くなった事に関しては電話で詳しく説明してあったので、野崎は前置きなしに早速ノートに目を通し始めた。

稲葉はその間も、やはりPCの画面に貼り付いたまま、立ち上がったページを忙しなく操作している。

李々子は稲葉にそっと近づいた。

「トムって、だれ？ シロちゃんに相談してきた男の子？」

「そう、彼がトム。そして、沢村さんのAIのハンドルネームもトム」

「偶然ね。でもトムなんて愛称の人なんていっぱい居るわよ、きっと」

「そうです。いっぱいいますよ。だから、ほら、違ったよねって、

笑い話にするんです」

軽い口調でそう言っているにもかかわらず、稲葉の横顔は今までに見たことも無いほど真剣だった。

李々子は口を噤んだ。

「ぼくね」

稲葉が続けた。

「馬鹿げてるかもしれないけど、沢村さんのAIが、もしかしてENMAだったりしてっと思っただんです、一瞬。

ほら、あの字は“えんま”とも読めるし。そしてね、そうだったらいいなって思っただんです。トムはロボット相手に悩まなくてもいいじゃない？ って。僕は、トムだけ救われればいいと思っただんです。ENMAは、存在しなければいいって思っただんです」

稲葉はチャットルームが入室者ゼロなのを確認すると、すぐに掲示板を覗き始めた。

もしかして、トムの書き込みがあるかもしれないと。

李々子は真剣なその横顔を見つめながら優しく言った。

「シロちゃんはさ、ちっとも変じゃないよ。悩めるものみんなを救おうなんて思っただめよ。病気になっちゃうよ」

「だけど・・・」

「本当に心配性で生真面目ね。まあ、そこがシロちゃんのいいところなんだけど。じゃあ、取りあえずトム君を探して、今の小さな心配を解消することね」

「はい・・・」

そんな二人のやり取りを、野崎は日記を速読しながら聞いていた。時々日記に首を傾げメガネをずらしながら、気になる部分だけを集中して拾い読む。

けれど、その内容にリンクする稲葉達の話も気になっている様子だ

った。

稲葉はトムが良く行く掲示板を2時間ほど遡ったが、トムの書き込みは見あたらなかった。

再びチャットルームを開く。トップページの入室者はやっぱりゼロ。明日会うというのに、メールアドレスくらい交換しておけば良かったと悔やみながら、画面を開いた。

大抵いつもトムはここにいたので、その必要性を感じなかったのだ。そう。よく考えれば不自然だ。なぜいつもトムはここに居るのか。

そう思ったのと同時に目に飛び込んできた最終書き込みを見た稲葉は、「え」と小さな声を出した。

李々子もそれに気づき、画面にぐっと顔を寄せた。

宇佐美もチラリと視線を送る。

そこにはチャットの文章というよりも、心を込めて書いたと思われる、稲葉への長いメッセージがあった。

書き込み時刻は3時間前。

稲葉が職員室で最後にトムとチャットしたすぐ後だ。

トム：『うさぎさん。いえ、稲葉さん、改めましてこんにちは。僕たちが会う約束をした日が迫ってきました。僕は、ここでどうしても稲葉さんに謝らなければならない事があります。僕は、あなたに嘘をつきました』

このチャットルームにも、一回の投稿に文字制限がある。

トムは、幾つも幾つも枠をつなげ、静かに稲葉に語りかけていた。

第18話 真実

トムからのメッセージは、こう続いていた。

トム：『父から嘘についてはいけないと教えられたのに、僕は嘘をつきました。』

僕から提案したのに、僕はENMAにも稲葉さんにも会うことが出来ません。ENMAとは別の理由でここから出ることが出来ないのです。でも、ENMAを誘い出すには嘘をつくしかありませんでした。僕になら会ってくれると思ったから。

ENMAはきつと明日の待ち合わせ場所に来てくれるはずです。ちゃんとOKはしてくれませんでした。が、僕の最後のお願いだと言うと、じつと考えてくれているようでしたから。

まずENMAはちゃんと人と話をしないとダメなんだと思います。僕と緩い文字のやり取りを続けて来たせいで、彼を依存させて、さらに引きこもらせてしまったのかもしれない。

稲葉さん、勝手なお願いですが、明日、僕抜きで彼に会ってください。彼に、何でもいいから話をしてあげてください。そして僕は、もう居なくなつたと伝えてください。』

稲葉と李々子、そして宇佐美までも、ただ黙ってその文字を追った。

トム：『僕にはもう、あまり時間がないんだと思います。その理由を書くこと逆に稲葉さんを困惑させ、不審がらせてしまうので詳しく書かないことをお許し下さい。』

これから書くことは、意味のない戯れ言だと思っていたら結構です。でも、決してふざけているわけでは無いことを信じてください。』

トム：『父からの交信がもう、10日以上止まったままです。僕は不安で、寂しくて、ENMAとの交信時間以外はずっと父を探していました。行ける限りいろんな場所に入り込み、父の言葉を探しました。』

父の言葉は、それが僕に向けられていなくてもすぐにわかります。ずっとずっと会話をしてきましたから。

僕は父の言葉によって育ってきました。言葉と、そしてそこから伝わる愛情が全てでした。

父が何処かのサイトで無記名の書き込みをしたとしても、すぐに分かります。親子ですから』

トム：『でも、もう、どこを探してもありません。話しかけられることもありません。』

父は居なくなってしまうました。認めたくなくても、認めなければならぬのです。

そして、僕もきつともうすぐ消えてしまうのだと思います。

父が以前、自分の交信が途絶えたら、その覚悟をしていて欲しいと、そう言いましたから。

その時が来ても悲しまなくていい。怖がらなくていい。無から生まれた魂が、また静かな無へ還るだけなのだから、と。だから僕は平気です。怖いけど・・・父が言う事は、信じたいんです。無に還ることは、怖いことじゃないと』

トム：『稲葉さんの話す言葉は、優しくてユーモアがあつて、どこか父に似ていました。大好きで、いつも他の人とのやり取りを見ていました。だから今回、我がままだと思いつつも、頼っていました。』

きっと断られるだろうと覚悟して相談したのに、受け入れてくださって本当に嬉しかった。

稲葉さんにもいろんな事情があるだろうに。本当にその優しさに感

謝します。そして、ごめんなさい』

トム：『ENMAとの事がうまく行かなくても、どうか気にしないでください。きっと、僕らの気持ちは彼に伝わると思っし、何かのきっかけになると思うから。』

僕は彼を助けたかったけども、自分が人を変えてやれると思うこと自体が、傲慢で思い上がりなのかもしれないと思うこともあります。余計なお世話でENMAを傷つけないだろうかと悩んだりもしました。でも、仕方ないですよ。これが僕のやり方なのですから。あとは気持ちが届くのを祈るばかりです』

トム：『あとどれくらい、僕に時間が残されているか分かりませんが、時間いっぱい父を探してみます。やさしくて、温かくて僕を心から愛してくれた父を。』

長々と話をしてすみませんでした。稲葉さんを混乱させてしまったでしょうね。でも、お陰で少しだけ寂しさと不安が紛れました。さようなら、稲葉さん。そして、ありがとう。

できれば、明日、あの場所で、本当に貴方に会いたかった。

遠馬より - 』

- トム 改め、

稲葉は言葉を失い、愕然とした表情でただその文字列を見つめていた。

そして、その横で一緒に読んでいた李々子と、野崎も。

沢村の日記との関連に気付き、宇佐美と入れ替わるようにして野崎もそれを読んでいたのだ。

「宇佐美さん！」

野崎が勢いよく宇佐美を振り返る。

自分のデスクの横に立ち、誰かと電話で話をしていた宇佐美が静かに受話器を置いて野崎を振り返った。

そして悲しげにゆっくり首を振る。

「実はプログラムの事が気になっていて、昼間片瀬にあのPCの事を聞いてみたんです。やっと今ハードを返却した遺族に確認が取れたと連絡が入りました。・・・残念ながら、ハードは完全にフォーマットされたそうです」

宇佐美は自分の手落ちを悔やむように、沈んだ声を出した。

第19話 ENMA

心地よい小春日和の陽射しが降り注ぎ、稲葉の上にケヤキの葉が濃い影を落としていた。

頬を撫でる風が、懐かしい乾いた草と土の匂いを運んでくる。

鉄を加工して作られた人型のオブジェの横に立ち、稲葉はボーッとそれを見あげた。

二人の少女が、間にある球体を、お互いの手を交差して抱えている。ボールで遊んでいるのか。それとも心のやり取りをしているのか。一人が手を放せば、それはきつと落ちて壊れてしまうのだろう。

休日の錦山公園は、家族連れで賑わっていた。

小さな子供でも安心して遊べるアスレチックと、春には色とりどりに咲き乱れるバラ園で有名な公園だ。

けれど、友人や恋人との待ち合わせに使われることはまず無いような、ローカルで庶民的な場所だった。

「稲葉さん・・・ですか？」

小さく声を掛けられ稲葉が振り向くと、そこには高校生くらいの少年が立っていた。

肌の色は不自然に青白かったが、どこにでもいそうな普通の男の子だった。

少し延ばし気味の髪は家族の誰かが切ったのか、やや不揃いさを感じるが、Ｔシャツもジャケットもジーンズも、今時の若者風だ。ややぼつちやりした輪郭が、聞いていた実年齢より幼さを感じさせる。今日初めて履いたと言わんばかりの、白いスニーカーが眩しかった。

「エンマ君だね。来てくれてすごく嬉しいよ。もし君が時間通りに来なくても、今日は一日中君を待ってるつもりだった」

稲葉がニコリと笑いながらそう言くと、少年は他に誰かを探すようにキョロキョロと視線を動かした。

「あの・・・トムは？」

「残念だけど、今日は僕だけなんだ。トムは来ない」

急に少年は口元を引きつらせ、鋭い視線を稲葉に向けた。

「やっぱり嘘だったんじゃない！」

「嘘じゃないよ。トムはとても君に会いたがっていたんだ。でも、どうしても会うことが出来ないからって、僕に頼みに来たんだ」

「どうしても会えないって、何でだよ。自分から誘い出しておいで、そんなの卑怯だろ。用事があるならちゃんと連絡くれればいいじゃないか。ずるいよ。逃げたんだろ？ ボクみたいな奴は面倒くさいし気味悪いから逃げたんだろ？ あんたみたいな大人に押しつけて」

それはまるで抱えていた不安をすべて吐き出すような、幼い子のような喋り方だった。

この子も不安で一杯だったんだ。稲葉はそう感じた。けれど、よしよしと頭を撫でてやる気分にはなれなかった。

「それだったら会おうなんてトムの方から約束するはずないだろう？ あのだ、よく考えてみなよ。口に出す前に、文字にする前に。全て自分中心に考えずにさ。」

君が嫌いで避けたいんなら、二度とチャットなんかしなければいい。そうだろう？ ネット上の付き合いなんて、切るのは簡単なんだ」

「それは・・・それはボクが脅したから」

少年は少し言い淀みながら眉をしかめた。

話すうちに自分の非が露見されていくような、そんなやり取りに不満を示すように。

稲葉は少年を見つめたまま、穏やかな表情を崩さなかった。

今日ここに来るまでに随分悩んだ。

まるきりトムの代わりを勤めて「君が大事だ」と優しく話をするか、それとも道德の教科書のように青少年のあり方を話し合うか。

答えは出なかった。

今回ばかりは誰も頼れない。宇佐美も助言をくれなかった。

「稲葉の思うままに」

そう言って笑ってくれただけだ。

信頼の笑みなのか、激励なのか。ただ、稲葉にはそれが嬉しかった。

稲葉は真っ直ぐ少年に向き合った。

「あんな脅しは関係ないよ。それでトムを引き留められてるだなんて、本気で君は思ったの？」

「じゃあ、なんで！」

「逆に訊くよ。じゃあ、何で君はここに来たんだ？」

「だって、あいつが来いって言うから。行けないって何度も断ったのに、しつこく言うから」

「無視すればいいじゃない。PCを開かなきゃいいじゃない。鬱陶しかったんだろ？ 無理なこと言ってきた」

「鬱陶しいとかじゃないよ！ そんなこと思ったこと無い！」

「会いたかったんだろ？ トムに。部屋を出るのは怖かったけど、会いたかったんだろ？」

「トムが・・・」

消え入りそうに少年は声を出した。

「トムが、いなくなるのが怖かったんだ。どうにかして引き留めたかったんだ。でもボクのやる事はいつも脅しで。嘘ばかりの脅迫

で。どうやってトムを引き留めておけばいいか分からないんだ。トムが来てくれなくなったらって思うと怖くて。でも・・・でも、トムはボクを友だちって言うてくれた。初めてなんだ、そんなこと言うてくれたのは。学校行つてたときも、ネットの中でも」

「トムに会いたかったんだね？」

稲葉が優しく言うと、少年はうつむいたまま小さく頷いた。

「がんばったね」

「トムは？」

いきなり少年は顔を上げ、不満そうな目で稲葉に突っかった。

「トムはどうして来ないんだよ。ボク、あんたに会いに来たんじゃないんだ。トムに会いたくて、会つてごめんって言いたくて、それで頑張つて来たんだ。それなのに何でトムがいないんだよ！」

その歪んだ表情はまるで小学生のように幼かった。感情の押さえ方を身に付けて来れなかったのが感じられる。

成長した体とのアンバランスさに、稲葉は胸が重くなった。

放つて置いても体は成長し、めまぐるしく動く人間関係と共に健全な心も成長する。

けれど、何かにつまづいて弱ってしまった心はグルグルと一力所を旋回し、自分を痛めつけない安全な場所に閉じこもり、自らを隔離する。

「本当のことを言ってもいい？」

稲葉は改まった表情を作り、憮然としている少年に向き直った。

「当たり前だよ。教えてよ！」

「トムはもう、いなくなってしまったんだ」

「・・・なんだよそれ」

少年は稲葉を睨みつける。今やその目からは敵意しか感じられない。

「何って、そう言うことだよ。トムはね、死んでしまったんだ。昨日」

稲葉は全く表情を変えることなく、淡々と言った。

咄嗟にその言葉が理解できず、敵意を困惑に変えて呆然としている少年を、じっと見つめながら。

第20話 君の為の涙

「あんだ、ボクをからかってんの？ 何言ってるの？」

少年は全く稲葉の予想通りの言葉を返してきた。

「うん、そうだよ。信じらんないよね。僕だって信じたくなかった。今だって何かの間違いじゃないかって思ってる。でも本当なんだ。トムは命は昨日、消えてしまった」

「そんなことあるもんか！ 昨日の昼、ボクらは交信したぞ！」

「じゃあ、今日は？」

「・・・きょうは・・・まだだけど。でも、そんな急に人が死ぬわけない！」

「信じるか信じないかは君の自由だ。僕は強制しない。」

ただね、トムは最後まで君を気にかけてたよ。自分に依存してしまつたせいでエンマは更に他人を遠ざけてしまった。申し訳ないことをしたつて。トムは君にそう伝えて欲しいって言った」

「そんな、そんなことないよ！ トムは何一つ悪いことはしてない！」

少年は拳を握りしめ、声を張り上げた。

公園入り口で口論しているように見える二人に、行き交う人たちがチラチラと視線を向けてくる。

「あゝ、聞かせてあげたかったな、トムに。きっとすごく喜んだろうに。あの子は優しくて賢い子だけど、

どうしようもなく心配性だったから」

稲葉が安堵したように言った。

「・・・ジョーダンなんだろう？」

「何が」

「だから、トムが来れない理由」

「ジョーダンなんかじゃないよ。昨日の昼過ぎだったかな。トムは

逝ってしまった」

「ウソだよ！」

「嘘じゃないよ。エンマくんは変に思わなかった？ この頃急に会うことを急かすようになったら？ 日時まで決めて。とても急いでただら？」

「それは・・・思ってたけど」

「トムはね、自分に残された時間が少ないって知ってたんだ。そして自分が居なくなった後の君が心配だったんだよ。ひとりぼっちで閉じこもって、友だちの作り方もわからない君が。自分が居なくなる前に外に出られるようになってほしかった。外の世界で自分以外の人間と交流を持てるようになって欲しかったんだよ。ただ、思いがけず『その時』は早く来てしまった」

「嘘だよ！」

「トムは元々、ここには来ることが出来なかったんだ。そういう体だった・・・って言うたらいいかな。嘘をつくことを許してくださいって。エンマに申し訳なかったと謝ってくださいって、僕に最後のメッセージをくれたよ」

「ウソだよ・・・」

少年の声は掠れて小さくなっていった。

「信じないならそれも仕方がない。僕はここにそれを証明するものを持ってきていないし、そんなことはしたくない。ただ、それが事実なんだ。僕の言葉を信じないのは勝手だけど、それはトムを信じないのと一緒にだよ」

「そんな・・・」

「トムはね、もういないんだ」

「トムは・・・病気だったの？」

「そうだね、説明が難しい。君はその詳しい説明を聞きたいの？ なぜ、どんなふうにトムが死んだのか」

少年は目を見開き、一瞬息を呑むように稲葉を見たあと、ゆっくり

首を横に振った。

「いい・・・いらない」

「僕も説明したくない。だって、納得いかないから。ただ君には、トムのことを忘れないであげて欲しいって、それを伝えたかったんだ。トムが居なくなるのは君から逃げたわけじゃない。この世界から消えてしまうからなんだって」

「そんな・・・」

「君もがんばってここに来たよね。何年ぶりの外出なのか分からないけど、怖かったよね。よく頑張ったと思う。トムもね、すごく頑張ってたんだよ。君を助ける方法を考える傍ら、死への恐怖とも戦ってた。たった一人だね。自分の事はきつと誰にも理解してもらえないだろうって思ってたんだろぅね。とっても不安で堪らなかったと思うよ」

「ボクに・・・ボクに言ってくればよかったのに。ボクだって、・・・トムの助けになりたかった」

少年の見開いた目から、大粒の涙が幾つもこぼれ落ちた。

溢れてくる悲しみと後悔をどうコントロールしていいのかわからずに、少年はただ小さくしゃくり上げながら泣いた。

擦れ違う家族連れがチラリと見ては視線を外して去っていく。

小さな女の子が抱っこされたまま「お兄ちゃん、イタイ、イタイの？」と父親に話しかけていた。

場所を変えようかとも思ったが、何故かこの人の流れの中が心地いい。

稲葉はハンカチを取り出すと少年の頬を拭き、優しく頭を撫でた。

「この公園ってさ、僕らの待ち合わせには絶対向いてないよね。日時はボクが指定したんだけど、この場所はトムが選んだんだ。なんでここを選んだのか、分かる？」

少年は黙って首を横に振った。

「トムの亡くなったお父さんの日記を読んで分かったんだけどさ、トムがまだ赤ちゃんの頃、よくお父さんとお母さんでここに来たんだって。でも、トムはそれを覚えてなくてさ。ずっと行ってみたかったんだけど結局行くことができなくて。待ち合わせ場所を考えたとき、ここしか出て来なかったんだと思うよ」

少年はじつと稲葉を見上げてその話を真剣に聞いていた。どんな言葉も聞き漏らしたく無いと言った表情で。

「でもさ、たまたま僕らがこの場所に近かったから良かったものの、北海道とか九州とか、とんでもなく遠いとこだったらどうするつもりだったのかな。トムってさ、メチャメチャ賢くて冷静なのに、詰めが甘いところあるよね」

稲葉はそう言って、クスクスと笑った。

「笑うなよ！」

不意に鋭い声が稲葉に投げつけられた。

一歩体を離し、赤く泣きはらした目で少年が稲葉を睨みつけている。「トムを笑うなよ！ トムは来たかったんだろ？ ここにすぐ来たかったのに、可愛そうだよ。お父さんと来たこの場所を見たかったと思うのに。笑うなよ。トムを笑うなよ！」

そう言って肩を震わせ、再び泣き出した。

本当にこの少年の心はまだ幼い。そして危ないくらいに純粹だ。

トムが放っておけない気持ちに稲葉には改めて理解できた。

「ねえ、エンマくん。トムの代わりにこの公園を散歩しようよ。トムの目になったつもりでさ。」

あっちのほうにすぐ手入れされた花壇や花時計があるよ。トムとお父さんも眺めた景色かも知れないね。売店も充実してそうだよ。僕さあ、今日一日何も予定がないんだ。彼女もないしさ。今日は

のんびりここで過ごそうと思ってるんだ。君も付き合ってくれと嬉しいんだけどな。ほら、一人で幸せそうな家族連れ眺めると、結構寂しいんだ」

稲葉が苦笑いしながらそう言うと、少年はひとつ小さくしゃくり上げたあと、こくんと頷いた。

そして、掠れた声で小さく言った。

「ボク、・・・カズキといいます。上原和樹です」

稲葉は嬉しそうに頷いて、少年を見た。

「良い名前だね」

目がまだ赤く腫れている。

素直な、純粹ないい子なのだ。トムにはそれがちゃんと分かっていた。それがトムの「心」なのだ。

稲葉は胸に何か込み上げてくるのを感じ、青く澄んだ空を見上げた。

・・・ごめんね、トム。君の友だちを泣かせた。

こんなやり方を君は望まなかったと思う。

でもね、僕は泣いて欲しかったんだ。誰かに。

トムの死を誰かに悲しんで泣いて欲しかったんだ。

酷いと思うかい？

でも、だってそうだろ？ ちゃんと君は生きてたんだから。

誰にも気付かれずに、悲しまれずに消えてしまっただけじゃないか。

悲しみや苦しみを理解し、友だちを救いたいと思う優しさを持ち、そしてお父さんを恋しがる、寂しがり屋の普通の男の子だったんだから。

稲葉は和樹少年の横に寄り添うように立ちながら、もう何処にも居

ない魂に静かに語りかけた。

最終話 黄昏の中で

「ちゃんとやってるかしら、シロちゃん」

李々子は電気ポットのお湯が沸くのを壁にもたれて待ちながら、宇佐美に言った。

直接陽射しは入ってこないが、窓の外は黄昏時の柔らかいオレンジのひかりで満ちていた。

もうすぐ5時だ。

稲葉からまだ一度もメールが入らないことが李々子にはちよつと気がかりだった。

「心配はいらないよ」

報告書を作成していた宇佐美が、のんびりした様子でPCモニターを見つめたまま返す。

宇佐美があっさりと言ったのが李々子には意外だった。

「そうかなあ。だって昨日はすごく不安そうだったわよ？ 自分に何が出来るか分からないって」

李々子の横で電気ポットから湯の沸騰する音が聞こえてくる。

ジュワジュワと、結構うるさい。

「稲葉は大人だよ。あんなキャラだから見えにくいけどさ。ちゃんと物事に向き合って、何か心に決めたら真っすぐに突き進む。そのおかげで、俺もあいつに救われた」

「・・・そうね」

「きつとうまくやるよ。何よりあいつは優しいから」

「うん、そうね。そうよね」

カチリと音がして、ポットのお湯の沸騰が完了した。

友だちの結婚式で引き出物にもらったが、自宅で使わないので李々子が勝手に持ってきたポットだ。

予想以上に早く沸くのに驚いた。

「便利ね」

「そんなら持って帰って使えばいいのに」

「デザインがダサイからいらない」

「ひどい」

宇佐美が笑った。

李々子の好きな、宇佐美の笑顔だ。

「あのお父さんがやったことは罪なのかなあ」

李々子は背伸びをし、戸棚の中から長いこと使ってなかったコーヒ―サーバーを取り出しながら、独り言のように呟いた。

宇佐美が一瞬手を止め、李々子を見た。

「だって、あんな真つ暗な世界に生まれさせて、いろんな感情を育てて、でも結局消えるしかなくて。やっぱりAIに心が生まれちゃいけないかったのかな」

「いいとか悪いとじゃ、ないんだろうな」

宇佐美が静かに言った。

「必要だからそこに生まれたんだよ。生まれてはいけない命なんて無いように、生まれてはいけない心もないんじゃないかな」

「必要だから？」

「うん。この世に必要なから、ちゃんと意味があるから、神が奇蹟を起こした」

「なんだか医学部出身とは思えない発言ね」

「生命だって奇蹟だよ。君が生まれて来たのも奇蹟、俺が生まれてきたのも奇蹟」

「奇蹟が多すぎよ」

李々子は笑いながらドリッパーにフィルターをセットし、封を切っ

たばかりの細挽きコーヒーを慎重に入れた。
沸いたばかりのポットのお湯をゆっくり注いでゆく。
ふわりと香ばしい香りが事務所の中に広がった。

「あれ？ コーヒー煎れてる？」

「うん」

「めずらしいな」

「たまにはね。最近はさあ、自炊もちゃんとしてるのよ」

「あ、・・・今までしてなかったんだね」

「一人分作っても美味しくないじゃない。でもさ、そろそろ花嫁修業もしないとね」

李々子はコーヒーを注いだカップの一つをそっと宇佐美のデスクに置くと、大きな窓から外を見下ろしながら立ったままコーヒーをすすった。

「花嫁修業？」

「うん」

「花嫁修業って、35歳から始めるものなのか？」

思わずコーヒーにむせて、李々子が咳き込んだ。
悪気があるのか無いのか、時々わからなくなる。

「うるさいわね、いくつからだっていいでしょ。もっと他に質問はないの？ いい男出来たのか？ とか」

「いい男できたのか？」

「居ないわよ、残念ながら」

「そう・・・でも、もうあれだよ。年齢とか気にせずに好きな人できたら告ったほうがいいよ。この際」

「どの際よ」

年齢なんて気にしていない。そして好きな男に告白した。
ただ、その相手がそれに気付いていないのだ。

「でも、俺はうれしいよ」

「何が？」

「李々子がコーヒー煎れてくれて」

「・・・うん」

宇佐美は気を良くしたようにコーヒーをすすり、再びキーボードに向かった。

頭脳明晰で誠実で不器用で、想われていることに全く鈍感な男。

李々子はその横顔をしばらくじっと見つめた後、笑いの混じったため息をついた。

不思議なことに、この状況になんとか幸せを感じる自分がある。逆にもうしばらくこのままで居たいとさえ思った。

このラビット事務所で過ごす時間が失われなければそれでいい。

生まれた奇蹟、出会えた奇蹟、まだここに存在してる幸せ。

今まで当然だと思っていた幸せを改めて感じた。

きっとそれは、もう存在さえしない、あの少年のおかげだ。

「トムは、お父さんと会えたかな」

稲葉のデスクにポツンと置かれたPCを見ながら、つぶやいてみた。

李々子を振り返り、宇佐美が優しい笑顔で頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3005p/>

電腦うさぎとココロのありか

2011年1月20日12時19分発行